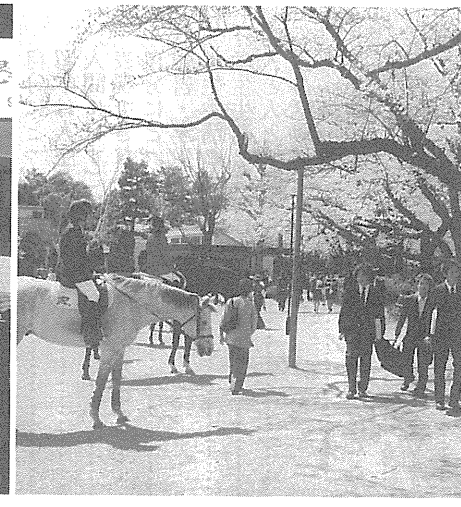
麗澤教育　第六号　〈目　次〉

写真・麗澤大学近況……2
〈特集・留学を考える〉
麗澤大学の留学を考える……三潴　正道……6
国際経済学部における海外留学制度の現状と今後の展望……大場　裕之……13
麗澤大学の「異文化体験セミナー」……町　惠理子……21
ドイツへの留学―その経緯と現状……奥野　保明……27
〈私たちの留学体験―海外で得たもの〉
留学は人生の肥やしである……渡辺かおり……33
私の天津留学……高野　優紀……38
貴重なイギリス留学体験……新保　朋也……43
〈私たちの留学体験―日本で得たもの〉
自分にとっての留学……カンハー・ソーパー……49
留学は人生そのものだ……劉　怡……51
人間にはすごい適応力がある……游　期斐……54
表現できないほど多くのものを得た……崔　慶植……56
自分にとっての留学……ファルク・マインハルト……58
〈報告・学生生活と課外活動〉
学生生活の現況……富塚　信治……62
学生生活と課外活動の現況……松田　寛……64
人と人との関わりの中で……今村　直美……68
〈課外活動報告〉
テニスを深く楽しむには……宗　中正……71
フィギュアスケートを通して学んだこと……川崎由紀子……79
山と私　〜山の会を通じて〜……石川　暁崇……84
〈第三十六回麗澤大学麗陵祭レポート〉……麗陵祭実行委員会……89
『日暮硯』を出展して……丸山ゼミ……98

麗澤大学近況

外国人留学生歓迎懇親会
ドイツからの留学生が歌を披露



馬も新入生をお出迎え（平成11年度）

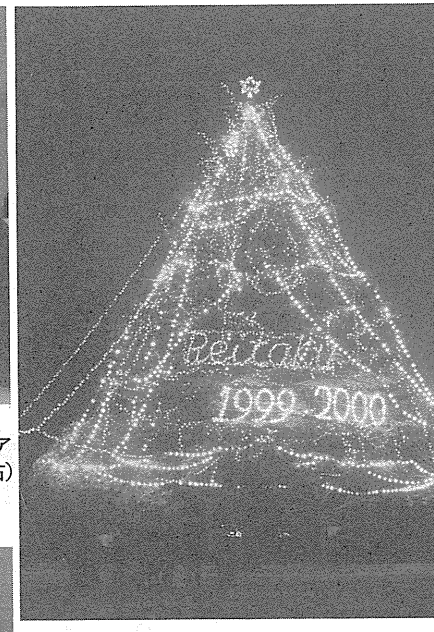
台湾・周大観文教基金会一行が本学を訪問

毎年恒例の野外昼食会

麗陵祭オープニングセレモニー

英語劇グループのOBが中心となり、ギャビン・バントック氏（元本学教授）の滞日30周年記念公演を実施

中国残留孤児の肉親探し―ボランティア親身になって話を聞く中国語学科生（右）



年末年始を日本で迎える留学生を励ましそうとキャンパスで巨大ツリーの点灯を行った

第72回日本学生氷上競技選手権フィギュア女子シングルで川崎由紀子さん（平成12年卒）が優勝　（写真提供・共同通信社）

学校記念日に留学生が民族舞踊（マレーシア）を披露

麗澤大学開学40周年記念、軽音楽部 OB 会を設立
軽音楽部 OB・OG、現役学生一同

合同就職セミナーを開催

麗澤大学の留学を考える
―歴史と展望、今後の取り組み―

国際交流センター長
外国語学部教授　三　潴　正　道

Ⅰ　留学の意味するもの

日本における留学ブームといえばまず思い浮かぶのはかの遣隋使、遣唐使の時代であろう。小野妹子（おのいもこ）に従って隋へ留学した高向玄理（たかむこのくろまろ）はその代表的人物と言える。

明治時代は国を挙げて留学を推進した時代である。学者、芸術家、軍人、思想家と枚挙に暇無いが、実は私の祖父もその一人だった。

ハイデルベルグ大学へ留学し、民法を日本に導入する一翼を担ったのだが、後に高村光太郎に譲ったというその下宿先は見つけられなかったものの、一昨年現地を訪れてその志を思い、いささかの感慨を禁じ得なかった。

現代もまた留学がブームである。しかし、その内容は、と言うと、前二者とはかなり違ったものであると言わざるを得ない。さまざまな比較の視点があろうが、よく言えば、〝留学の大衆化〟であり、やや意地悪く言えば〝「でも、しか、留学」の跋扈（ばっこ）〟と言えないこともない。

志があって留学するより、留学して志を持つきっかけが見つかればという留学、ともいえよう。

それが一概に非難されるべきものか、考えてみる必要がある。

経済的要因、交通の発達、教育の大衆化が留学を容易にした今日、モノカルチャーで育った日本の若者に

とって、現地で異文化と接触することは最も手っ取り早い覚醒方法である。

一生に一度海外へ行ければ、と言う時代ではない。その証拠に、二度目の留学を考えている学生も多い。もちろん、今度は〝志を持った留学〟である。留学も時代とともに変わっているのである。

Ⅱ　麗澤大学の留学制度史

①留学制度のスタート

本学では、一九八二年に外国語学部中国語学科が台湾の淡江大学と学術交流協定を結び、一九八五年から三年生の半年留学をスタートさせた。

当時としては日本国内で先駆的な動きであり、そのため、実現に漕ぎ着けるまでの苦労は並大抵ではなかった。

先例が無いこと、安全性の問題、留学費用や受け入れ費用の問題、留学期間中のケアシステムなど、双方が受け入れ経験を持っていないためすべてが手探りで、その気苦労たるや今とは比べものにならなかった。

しかし、学生に与えたインパクトは大きかった。本来、次年度に実施するはずだったのが、当時の三年生が、留年すれば来年も三年生だから留学に行ける、と集団留年を画策し、慌てて淡江大学に半年早く実施をお願いしたのも、今から振り返れば微笑ましいエピソードである。

以前にも本誌で紹介したことがあるが、担当者の一人だった私には今も忘れられない感動がある。

最初の年、本学の留学生を待っていたのは、必ずしも温かい歓迎だけではなかった。

当初は大学外の民間アパートを留学生寮として借りたのだが、その頃はまだ台湾でも反日感情が強く、朝起きると、アパートの門に抗議のビラが貼られていることがよくあったし、淡江大学の学生の間でも、日本語学科以外の学生の反応は総じて冷淡だった。

しかし、第一期の留学生たちは偉かった。積極的にクラブ活動に参加して友達を作り、〝麗澤の夜〟という交流パーティを立派にやり遂げ、学内の空気を一変させた。

一期生の精神は後に続く留学生にも受け継がれた。そして三年目の春、留学生の引率として台湾の空港に降り立った私は目を疑ったのである。

空港ロビーには歓迎の横断幕が掲げられ、大勢の淡江生が笑顔と歓声で出迎えているではないか。聞けば、どうしても空港に迎えに行きたいと学生が押しかけ、大学側はやむなくバスを二台チャーターしたという。

歓声を上げて駆け寄り、肩を抱き、手を取り合う両校の学生を見て涙が出そうになったあの時の感激を今も鮮明に思い出す。

「やっとここまで来た」と言う感慨、この日までの学生たちの涙ぐましい努力の数々…。

中国語学科の留学制度の成功はまたたくまに他学科にも広がった。そして、他大学にも広がった。

中国語学科やドイツ語学科のように、大学で初めて学ぶ言語にとって、留学制度の成果は大きい。何より聞く力の養成につながった。

しかし、留学の最も大きな成果は別のところにあった、と言えよう。

「自分を見つめる又と無い機会だった」。どれだけ多くの学生からこの言葉を聞いたことだろう。

「日本人であることを初めて意識した」、「日本のことを何も説明できない自分に唖然とした」、これもよく聞く感想である。

更に付け加えれば、この留学で初めて親から離れて生活をした学生が多く、留学をきっかけとして精神的自立を果たす学生が目についた。

〝可愛い子には旅をさせろ〟と言う。麗澤大学が始めた留学制度はまさにこの言葉どおりの成果を生んだのである。

そして、留学制度は新たな段階へと入っていく。

②クロス留学制度

留学制度発展の第二段階はクロス留学だった。そもそも、この〝クロス留学〟と言う言葉自体が本学のオリジナルで、第二外国語で学んでいる国へ留学することを意味した。

即ち、英語学科の学生が台湾に留学し、中国語学科

の学生がアメリカに留学する、と言った具合である。

この留学制度の反響は大きかった。二カ国語をマスターできると言う魅力が学生を惹きつけ、留学の結果、学生の視野が飛躍的に広がった。

ただ、残念なことに、バブルの崩壊とともに、費用のかかるアメリカ留学は希望者ががた減りし、中止に追い込まれてしまった。状況が改善されれば是非復活させたいものだ。

③双方向の留学制度へ

留学制度発展は更に第三段階を迎える。相手校からの留学生の受け入れである。

それまでの一方通行から双方向の留学制度になったことで、本格的な国際交流が本学に根づいた画期的な出来事と言えよう。

それまで留学して相手のお世話になる経験しかなかった本学の学生にとって、長期間、相手方留学生の面倒を見ることは初めての経験であった。

周りに配慮してもらうことがまるで当たり前のような生活に慣れ、育ってきた日本の若者にとって、それは、親の世代から見ると想像もつかないくらい大変なことであり、戸惑いの連続であり、それゆえに貴重な学びの場であったと言えよう。

エピソードには事欠かない。淡江大学との交流で私が気がついた例をいくつかご紹介しよう。

まず、顕著に表れたのが自分の都合と相手の都合とどっちを優先させるか、と言うことだった。

麗大生が留学したとき、淡江大の学生は麗大生の都合にあわせて自分のスケジュールをやりくりし、麗大生をいたく感激させたものである。彼らが綴った留学の文集にはそれを知った時の感激が記されている。

ところが、自分がお世話する番になった時、彼らは自分のアルバイトやデートの都合を後回しにすることがなかなかできない、留学生から不満の声が出るのも当然である。

こんなこともあった。淡江から来た留学生の歓迎パーティを開いた時、主催した学生たちが、普段食べたいがなかなか手が出ないお寿司をこの時とばかりにたくさん用意したのである。

中国人がナマモノが苦手なことはもちろん先刻承知。だからこそ自分たちがたっぷり食べられると言うことになる。

しかもあきれたことに、留学生たちがステージに立って挨拶をしている間に、まだ乾杯前であるにもかかわらず、四年生の一部が他学科の友人たちを誘い込んで今のうちとばかりにパクパク食べ始めてしまった。見つけた私に大目玉を食らったのは言うまでもない。

対照的な出来事が同じ期の留学生たちに起こった。彼らが帰国する時、謝恩パーティを開いてくれた。会員会館での立食パーティだったが、招かれた本学の教員、職員、学生たちに親切に料理を勧めながら、彼らは一向に自分で食べようとしない。聞けば、事前に別に食べているのでお腹が一杯だ、と言う。

感心なことだと思っていたのだが、いざ、パーティが終わって客が帰り、片づけに入ろうとした時、なんと彼らが、「アー、お腹が空いた！」と言って料理に飛びついたのである。

私はたまたま責任者の一人でその場に残っていて、この光景を目撃したのだが、豊かさの中で日本人が失ってしまっている礼節を改めて思い知らされた気がした。

このようなことは普段からの教育が大切で、教員側も大いに反省し見習うべきだろう。

卒業式の記念パーティで一人で幾つものケーキを抱えて、結局は食べ残して平気な学生。料理を取った後もテーブルの横に突っ立ったまま友人とおしゃべりをしながら食べるのに夢中で、他人が料理を取る邪魔になっていることにとんと気づかない学生。他人がスピーチしていても委細かまわず大声でしゃべっている大人たち。

双方向の留学制度はその日本人の異常さをわれわれに気づかせる働きまでしてくれたようだ。

④国際経済学部の留学

第四段階は国際経済学部の留学制度のスタートだろう。

それまでの外国語学部の留学が、異文化に触れるという側面があるにせよ、やはり語学力向上が大眼目であったのに比べ、国際経済学部のそれは語学はあくま

でベースであり、自分たちの専門分野の学習、研究をその上に築き上げることが主眼となった留学である。

当然、学生にとってはハードだが、得るものもまた大きい。それはとりもなおさず外国語学部の留学に欠けているものの提起であり、とりようによっては、新たな見直しを迫るものであったともいえる。

国際経済学部の学生にとっても、留学する前提として十分な語学力は不可欠で、そのために彼らが留学前に課された語学力到達度は、まさに外国語学部の鼎の軽重を問うものであった。

「みんながみんなそれを達成できているわけでもないでしょう」、などと言う発言は何の発展ももたらさない。

両学部の留学制度が互いの長所を認め、見習いつつ、さらに一歩進んで協力すべきところは協力してこそ、次なる第五段階の発展が見えてくるものと思う。

Ⅲ　今後の位置づけと展望

一九九九年四月から、これまでの国際交流課が国際交流センターと改称し、二〇〇〇年からは部に昇格して業務を充実させることになった。

本学の発展と、それに伴った国際交流の活発化につれ、より計画的、組織的、トータル的ケアが求められるようになったのは当然の趨勢である。

とりわけ、留学生の送り出し業務の整備は、学生に対する良質かつ均質なサービスの提供という観点から極めて重要であり、他方、個々の担当教員の負担を軽減し、責任の所在を大学本体に明確に据えるという点からも必要な改革であると言えよう。

単に事務的移管に止まらず、これを契機に内容の充実も図らなければならない。

最近、学科によっては、留学率がかなり低下している。バブル崩壊による不景気が家計を直撃し、一部の家庭で留学費用の捻出が困難になっているのも事実だが、もう一つの原因として、留学のメニューが学生のニーズと乖離している点も考えられる。

時期、行き先、内容の多様性をはかり、的確にニーズを捉え、掘り起こす姿勢が必要になる。また、留学

前の危機管理の講習の更なる充実も考えねばならない。

外国人留学生の受け入れの面でも改善すべきことは多い。日常的ケアのいっそうの充実はもちろんだが、彼らの多様なニーズにも応えなければならない。やはり、時期、期間、それと内容の多様化ということになるが、これを永続的に行うにはそれを可能にするバックアップシステムをしっかり構築しなければならない。

組織の充実はもちろんであるが、受け入れの最大のポイントは日本語教育のカリキュラムを支える体制の構築に尽きるだろう。

本学は、日本語別科、日本語学科、大学院を持ち、優秀な教員をそろえている。しかし、それぞれが目一杯に授業を持ち、研究を抱え、更に日本人学生の比ではない、一人一人にエネルギーを必要とする面倒も見なければならない。これまでのように、善意とボランティア精神によりかかるだけでは多様なニーズに対応するなどまさに画に描いた餅になってしまう。

幸い、本学の日本語教育をトータルに捉え、より効果的なシステムを構築すべく、専門委員会が精力的に作業をすすめている。下地は着実に整備されつつある、と言える。

本学には現在、二十を超える海外提携校がある。今後も増えこそすれ減ることはない。様々な内容の交流事業の提案も届いている。それらへの対応に追われているのが現状である。

この機会に、もう一度提携校の再確認を行い、地域バランス、相手校の特性をよく考慮し、これまでの貢献度等も踏まえて、きちんとしたランクづけによる万全の対応を考えてみてはどうだろうか。しっかりしたマニュアルができることで、対応にブレやロスが無くなり、それが次なる発展につながることになるだろう。

本学の国際交流では、すでに新しい芽生えが始まっている。それは、実質的な内容が伴った国際貢献である。タイで、ユーゴでボランティア活動が行われ、アメリカでは日本語教育の実習も行われている。

国際交流センターの発足が新たな展望を切り開くきっかけになるよう努力していきたい。

国際経済学部における海外留学制度の現状と今後の展望

国際経済学部教授　大場裕之

はじめに

留学から帰ってきた学生の顔は生き生きとし、そして輝いている。別人のように逞しくなって帰ってきた学生は麗澤大学の宝である。こうした学生を輩出する海外留学制度を学部創設以来実施してきた。この制度により海外留学を体験した学生は過去七年間の累計（一九九三〜一九九九年度）で二九一名にのぼる。そこで、以下では海外留学制度の位置づけ並びに目的や特徴、さらには今日に到る到着点と当面する課題を整理し、今後を展望する。

一、国際経済学部における海外留学の位置づけと目的およびその特徴

国際経済学部における海外留学制度は、学部の基本方針として、創設以来戦略的重要性を有している。その目的とは、同制度を活用した海外留学により麗澤大学の教育理念に導かれた「真に国際性を有する品性溢れる人間」を形成することにある。同制度は学部に設置された留学担当委員会により運営、実施されているが、委員長は学部長が兼務する形で力を入れている。現在、海外提携校は四校あり、そのうちアメリカが二校、イギリスが二校である。アメリカの提携先は、シリコンバレーの中心地にあるサンノゼ州立大学（San

Jose State University）と、黒船出航の地としても有名な東海岸にあるサルベ・レジーナ大学（Salve Regina University）である。イギリスの提携先は、ロンドンの中心にあり、地域研究に優れているロンドン大学・ソアース校（SOAS, University of London）と、イングランド中央部にあり経営分野を中心に勉強できるコベントリー大学（Coventry Business School, Coventry University）である。

当学部の海外留学制度の特徴としては、以下の六点が指摘できよう。

(1) 八カ月にわたる長期留学であること

初年度にあたる一九九三年は四カ月でスタートしたが、九四年以降は八カ月留学を実施している。留学の時期は二年次もしくは三年次の二学期である。八カ月以上となると、留学期間中に二学期分の授業料を麗澤大学に納入する必要性が生じるなどの問題がある。

(2) 単なる語学留学ではなく、専門的知識の習得を目的とする専門留学であること

この制度では、語学（英語）力の向上だけが目的ではなく、社会科学的な視点に立った知識習得に力点があり、基本的なものの見方・考え方を磨くことにある。例えば、ロンドン大学・ソアース校（以下SOASと略す）の授業では、地域の視点からグローバリゼーションの問題等を扱い、またサンノゼ州立大学やコベントリー大学では、ケース・スタディなどを通じて経済や経営の考え方を習得している。

(3) 提携校では、正規の授業も受けることができる

提携校によっても異なるが、麗大生のために特別にアレンジされた授業のみでなく、各々正規の授業を受ける工夫がなされている。例えば、コベントリー大学の場合には、Coventry Business Schoolで開講されている正規の授業に参加するために、その事前学習が同一教員によりなされている。もっとも、サルベ・レジーナ大学の場合は、当初から麗大生用の授業はなく、正規の授業への参加を前提としたプログラムである。なお、他の三校についても、麗大生のために特別にアレンジされたプログラムから提携先のプログラムに麗大生を組み入れていく方向にある。例えば、サンノゼ

州立大学の場合は、海外からの留学生を対象とする“Studies in American Language Program”において、またSOASの場合も同じく留学生を対象とした“IFCOS, International Foundation Courses for Overseas Students”のプログラムにおいて麗大生が勉強している。

(4) 留学先での習得単位を認定

提携校で取得した単位は、三〇単位を上限に麗澤大学の科目として単位認定される。ここで注目すべき点は、単位互換の上限が三〇単位から六〇単位に引き上げられたため、留学期間も含めその変更の是非について検討する必要があろう。

(5) 留学前の事前学習の実施

留学する学生の大多数が二年次生であるが、留学の事前準備として一年次では英語関連科目およびTOEFL対策クラス（春季集中クラスも含む）を受講する。また、二年次一学期では、このような授業に加えて、英語特訓授業や留学帰国学生と共に学ぶ授業も用意されている。

(6) 一〇〇万円を上限とする奨学金制度

国際経済学部では、海外留学支援強化策の一環として一九九九年度より、これまでの奨学金（第一種：三〇万円、第二種：二〇万円、第三種：一〇万円）に加えて、特別種として、一〇〇万円を上限とする奨学金を新たに導入した。選考の基準としては、学力とくに英語力が優れていることを重視し、その目安はTOEFL五五〇点もしくはこれに相当する英語力としている。また、人物においても品性に優れ、麗澤大学を代表する模範的な学生であることなども選考基準に含まれている。一九九九年度は、海外留学決定者一八名のうち、二名がその対象者に選ばれた。許斐洋子さん（国際経営学科二年、サルベ・レジーナ大学留学）と加藤泰介君（国際経営学科二年、SOAS留学）に栄誉ある一〇〇万円の奨学金が授与された。

二、これまでの経緯

海外留学制度は一九九二年の学部創設時よりスタートし、今年で八年目を迎えようとしている。この間、

留学制度のより一層の充実を目指し、留学担当委員会が中心となり学部をあげて様々な試みがなされたが、その主なカイゼン内容を層別すると以下の五点があげられる。

(1) 提携校の全体的調整および新規開拓

留学制度が発足した当初は、イギリス三校、アメリカ一校、合計四校と提携関係にあった。イギリスは、上述の二校のほかロンドン大学ロイヤルホロウェイ校(Royal Holloway, University of London)と提携していた。また、イギリスの三つの提携校へ留学する際に、イギリスの地にて一カ月の「暁星プログラム」が実施された。このプログラム終了後、各提携校へ分散する体制がとられた。「暁星プログラム」とは、英国暁星国際大学(ロンドン郊外のレディング市)との提携によるイギリス留学導入・語学プログラムである。同プログラムには、パブリック・スクールの名門であるマルボロー・カレッジ(Marlborough College)での一週間の研修も含まれる。しかし、「暁星プログラム」は留学した学生の評価も高かったが、留学費用が高いことと各提携三校が自前の語学プログラムを導入したことにより、発展的に解消された。また、ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校についても、Young Enterprise Project なる起業コース(麗大生が実際に会社を起こして、商品の生産・販売などの企業活動を体験する)や政府機関や企業訪問研修なども盛り込まれているユニークなプログラムであったが、留学費用が他のプログラムよりも割高であることなどの理由から希望する学生が少なく、中止せざるを得なかった。

一方、留学希望先をアメリカにする学生が多いのに対して、その受け皿としてサンノゼ州立大学一校だけでは不十分との判断から、新たに新規の提携校を開拓する必要性が生じた。その候補の一つとして浮上したのが、現在提携しているサルベ・レジーナ大学である。同大学の正規の授業に直接参加し単位が取得できるプログラムであり、一九九八年度よりスタートしている。

(2) 提携校の個別プログラムの改善

留学中の学生および帰国学生からの要望や提携校と

の緊密なる情報交流により、留学プログラムを学生にとってより一層魅力的なものにすべくカイゼン活動を実施してきた。例えば、SOASでは、麗大生は上述のIFCOSといわれる海外からの留学生を対象とする国際コースで学んでいるが、当初は麗大生が授業で一緒になるシステムであったので、いわゆる「麗澤ムラ」が形成され、やる気・学力の低下が危惧された。そこで、これを排除するための対策がSOASと協議され、その結果現在では、IFCOS全体の中で麗大生が自由に科目を選択できるシステムとなり、この問題は解消されている。他の三校についても「麗澤ムラ」排除の対策が講じられている。この他、八月に実施されている導入・語学特訓プログラムやホームスティ・学生寮に関して改善すべき点など多岐にわたって検討している。

(3) 英語力向上のための仕組みづくり

武器としての英語力が不十分のため、八カ月の留学のうち、最初の二〜三カ月をボーッと過ごし、脂がのってきた時には帰国という話は毎年のように聞かされる。留学は、アメリカやイギリスの地を踏む時ではなく、実は留学を決意したときにすでに始まっている。そのため、英米渡航前の英語力アップが最重要課題となるが、その強化策の一環として、上述したようなTOEFL対策クラスやいくつかの英語特訓授業が留学希望学生のために用意されている。

(4) 留学制度にビルト・インされたカイゼン・システムの構築

当学部における海外留学制度は、固定的なものではなく、留学を志す学生のニーズに即しない制度的問題があれば留学担当委員会が中心となりこれを直ちに修正し、再発防止に努めている。その仕組みとしては、留学担当委員会と提携校と留学希望および体験学生との三位一体によるコミュニケーション・チャネルが確立しており、これを活用した問題発見・解決策が講じられている。問題発見については、委員会による通常の情報収集に加え、帰国学生との懇親会、留学前に実施される留学説明会、提携校の担当者による説明会、帰国学生と留学希望学生のみを対象とする授業、提携

校への視察、帰国学生による「留学リポート」などによる情報収集がベースとなる。

(5) 留学担当委員会の機能強化

留学制度がうまく機能するか否かは、留学を旗印に掲げる学部方針に直接関連してくる問題なので、一九九八年より学部長が留学担当委員会の委員長を兼務する体制をとってきている。

三、当面する課題

このように本学部の海外留学制度はかなり充実したものとなってきた。しかし、以下に示されるように、近年留学する学生数が低下する傾向にあり、由々しき事態となっている。

即ち、一九九五年の五五名をピークにそれ以降低下し、九八年には三四名、さらに九九年は一八名へと留学する学生数が減ってきている。

△国際経済学部における海外留学学生数の推移▽

単位：名

一九九三年	九四年	九五年	九六年	九七年	九八年	九九年
五三	四七	五五	四〇	四四	三四	一八

この背景には、留学希望者数がここ数年間の傾向として低下しているという事実がある。入学時に新入生の半数近く、つまり二〜三名の学生のうち一人は留学を希望しているにもかかわらず、一年足らずで留学希望者数が激減している。一年次の留学希望者を対象とする留学説明会への参加数でみても、九七年の一一七名から九九年には八五名へと低下してきた。この原因として、大きく二つの要因が考えられる。ひとつは、外的・環境要因であり、経済不振により留学希望学生の経済的負担が増大し留学を断念せざるを得ないという理由である。もうひとつは、留学の前提となる英語力が落ちている、という内的要因である。前者の問題は日本経済全体の問題であるが、学部としては留学費用の削減策を講ずる必要があり、他方英語力低下の問

題については、現行の英語教育カリキュラムを抜本的に見直す必要があろう。

もうひとつの大きな問題は、海外留学から帰国した学生に対して、英語による授業が必ずしも十分ではなく、急速にやる気が消失する、いわゆる「逆カルチャーショック」症候群に襲われる学生が多いことである。現在、この対策として、新設の「英語セミナー」という科目を活用して留学帰国後のフォローをする体制をとっている。

四、今後の対策と将来展望

海外留学を志す学生数の低下の歯止め策としては、留学費用の削減と英語教育の改革を検討することが緊急課題となる。このことは、場当たり的な対症療法的な対策を意味するものではなく、国際経済学部、ひいては麗澤大学が標榜する「国際性」を真に実現する戦略の一環として位置づけられるべき対策である。したがって、この対策を講ずる場合には、向こう五〜一〇年先を見越した長期ビジョンを明確に提示することが必要となろう。その中で、英語教育や留学費用の問題が位置づけられることが肝要である。長期ビジョンのなかには、当然アメリカ、イギリスの提携校をベースとしたグローバル・ネットワークの構築、およびそのネットワークを活用した学生の単位互換や教職員の教育・研究交流といった麗澤大学の独自性・方向性が盛り込まれるべきである。現在のところ、当面する課題について、学部（とくに英語教育担当）および留学担当委員会は以下のような対策を実施予定もしくは計画している。

(1) 英語教育強化計画

英語力強化のための長期計画であり、少人数・集中方式による英語授業の実現を目指す。狙いは、クラスサイズを縮小し、毎日食事をする如く英語に毎日接し着実にレベルアップをはかることにある。実施は二〇〇〇年度からであり、五年後の二〇〇四年にはクラスサイズが二〇名（現在は四〇名程度）となることを目指す。

(2) 「留学コース」の創設

海外留学を軸とするモデルコースが欠落しており、英語を武器とするキャリア・アップにまで結びついていないのが実情である。そこで、留学の三位一体的コース、つまり入学してから留学するまでの事前学習、留学、そして帰国してから卒業までのフォロー学習といった「留学コース」を目に見える形で提示する。現在のところ、二〇〇一年度よりの実施を想定してタスク・フォースによる検討がすすめられている。

(3) 海外留学一〇周年記念行事の開催

三年後の二〇〇二年には海外留学制度が発足してから一〇年を迎える。そこで、この制度で留学を体験したOB・OGが参加するイベントを企画する。

(4) 一年以上の長期留学の可能性

単位互換の上限が三〇単位から六〇単位まで拡大されたことに伴い、八カ月以上の留学も可能となる。その際のネックとなるのが留学費用であるが、それを軽減するために一対一の交換留学システムを設ければ授業料は免除される。この可能性の検討にも着手する方向にある。そのためには、麗澤大学が海外の学生により魅力的な受け皿となるプログラム（例えば、英語による「日本研究コース」など）を用意しなければならない。

(5) 国際交流センターとの連携

二〇〇〇年四月より国際交流センターが開設されるが、同センターを通じて外国語学部との協力関係を築き、留学希望学生の観点から留学先のオプションを広げるなど両学部にとってメリットとなることを積極的に発掘していくことも必要となろう。

麗澤大学の「異文化体験セミナー」
―国際教育支援の試みの今までとこれから―

外国語学部助教授　町　惠理子

一、はじめに

異文化への対応能力養成や国際化への対応が強く望まれている現在、多数の大学でもその要請に答えようと様々な試みがなされている。「比較文化論」「異文化コミュニケーション論」などの授業を設ける大学が増えているのもその一つの現れであろう。また、語学力習得や異文化理解促進のために、学生に対し在学期間中に留学制度や語学研修制度を設けている大学も年々増えてきている。

麗澤大学においても外国語学部一学部のころから在学生に対し留学の門戸を解放し、主に専攻言語を中心とした柔軟性のある留学制度・研修プログラムを設けている。また、一九九二年に開設された国際経済学部も経済・経営専攻のための留学プログラムを設け、在学生に広く異文化体験のチャンスを与えている。このような環境の中で、留学自体を大学教育の一環として捉え、異文化の状況で学ぶ学生が個人の能力を充分に活かせるようにするために、従来以上に「異文化学習」への配慮をするべく、一九九二年に八代京子国際経済学部教授を中心として筆者と当時国際交流課職員であった水野治久氏が参加し「異文化オリエンテーションプログラム開発プロジェクト」を発足させた。一年間の調査の後、一九九三年から一九九八年まで「異文化体験セミナー」を実

施してきた。その内容は、おおまかに言って、いわゆるクロスカルチュラル・オリエンテーションを念頭においた留学事前研修プログラムとして実施された一九九三年から一九九六年の第一期と、留学だけを目的としない幅広い層の学生を対象とした異文化シミュレーション中心のプログラム展開を行った一九九七年から一九九八年の第二期に分けられる。本稿では今まで実施した「異文化体験セミナー」の概要と今後の課題について述べたい。(一)

二、第一期「異文化体験セミナー」プログラム

一九九三年から一九九六年に実施されたプログラムは以下の三点が大きな特色と言えよう。

(1) 体験学習を取り入れた異文化適応訓練法の導入

欧米、特にアメリカにおいては在学中に海外の教育機関に留学する学生に対して、事前研修としてクロスカルチュラル・オリエンテーションを実施しているが、その大きな特徴は、留学先の情報提供だけにとどまらないことである。異文化トレーニングの歴史の長いアメリカでは外交官や軍関係者の事前研修の経験から、講義や情報提供のみを中心とした、いわゆる「知識（大学）モデル」では異文化適応のための準備は十分ではないことがわかり、行動・情動面についても配慮をした「体験学習モデル」に基づいてプログラムを企画している。本学での試みも、セミナー参加者が座って話を聞くだけでなく、自分で考え、意見を述べ、行動するという、いわゆる「参加型」の異文化適応訓練法を導入した、ある意味で野心的なプログラムであると言えよう。このようなアプローチが可能だったのは本学において留学に関わる様々なオリエンテーションが各学科や学部において留学先ごとにきめ細かく行われていることに拠っている。

(2) 多様な留学プログラムに対応するために「文化特定」より「文化一般」を重視

本学の留学プログラムはイギリス、アメリカを含む英語圏のみでなく、中国圏、タイ、ドイツといった多様な文化圏を前提としており、行き先の文化を

限定した「文化特定」アプローチは適切でなく、留学事前研修としては珍しい、文化を特定しない「文化一般」アプローチを採用した。

(3) 異文化状況での危機管理に配慮

日本は基本的に安全な国であるが、そのような意識で海外に行くことが危険であるのはメディアで紹介される海外の事件からもわかると思われる。一般的に言って本学学生を含め日本人大学生の危機意識は低い。留学は短くても一学期間、長ければ二学期間であり、その間の学生生活を含め、休暇中の旅行などの際に、最低限どのような心構えが必要かを事例やビデオを通して紹介することは重要である。

これらの点に留意した結果、一日目に、留学に行く前にそのメリットとデメリットを質問票に記入しながら考える「留学目的の確認」、自己表現の度合いと異文化を考える「自己開示」、異文化を模擬体験出来る「バファバファ」を行い、二日目には、文化や教育経験がかかわるとされている「学習スタイル発見」、外部講師に依頼した「危機管理」、事例を中心にディスカッションで進める「クリティカル・インシデント」、留学経験者の体験を交え、海外での適応のプロセスを説明する「異文化適応プロセスとストレスの対処法」、最後は「留学経験者との懇談会」という二日間のプログラムを企画・実施した。

三、第二期「異文化体験セミナー」プログラム

一九九三年から一九九六年に実施されたプログラムは内容的には非常に充実したしたものであったが、いくつかの問題点があった。その中でも大きなものは参加学生の減少であった。これにはいくつかの理由が考えられる。セミナーはなるべく学生の参加しやすい時間帯を設定せねばならないが、カリキュラム上、二年生から三年生を含む留学予定者全てに都合の良い時間など無い。必然的に土曜日などの授業が少ない日になるのだが、通常、そのような日には学生はアルバイトなどの予定があり、参加したくてもできない。また、セミナーは二日通して一番効果的なように企画しているのだが、学生にとっては二

週にわたってセミナーに参加するのは難しい。それ以上にセミナーの期日設定が難しいのは本学での留学プログラムの多様さである。学生にとっては選択の幅がありプラスなのかもしれないが、留学プログラムの開始時期が同じでないため、いつ行うのが一番効果的なのか判断するのが難しいのである。それ以外にも実施の場所の確保といった様々な段取りにおける問題や、セミナーの講師が主に二名の教員に限定されていることもあり、年に複数回実施することは現実的でなかった。その反面、矛盾するようであるが、留学予定者ではない学生の参加希望が増えてきた。これは学内の国際交流団体であるＲＩＦＡの活動に触発されたものであろうと思われる。このような状況から、セミナーの目標を留学事前研修から学内の国際交流推進・学生の異文化間能力養成に軌道修正し、内容を大学の授業や学科・学部による留学オリエンテーションでカバーできないもので、なおかつ学生にとっての異文化体験学習を促進させる活動として、異文化シミュレーションのみの実施を行うこととした。

この計画に先立って一九九四年に留学事前研修としてのセミナーとは別に学内の学生を対象として『バファ・バファ』という異文化シミュレーションを実施したことがあるが、参加者の評価も高く、学内における国際交流の学生リーダー養成に貢献できると考えた。既存の異文化シミュレーションの中から上記の目標に合うものとして、異（多）文化における意思決定をテーマとした『エコトノス』を「異文化体験セミナー」として実施することとなった。(二)

『エコトノス』（Ecotonos）はギリシャ語の *eco*（ecology 環境、生態）と *tonos*（tension 緊張）を使った造語で、様々に重なり合っているコミュニティーによって形成された環境を意味し、その特長としては(1)他の多くの異文化シミュレーションと違い、同じ参加者に対して何度でも実施できることと、(2)参加者の置かれている状況やニーズにあうケースを使用することによって参加者の個別的な問題解決

状況にあわせて実施できることが挙げられている。対象となる学習者は学生からビジネスマンまで、経験や職業を問わず、日本では企業内研修などを中心に行なわれているが、大学において実施しているところはまだ少ない。このシミュレーションの学習目標は、(1)文化が意思決定・問題解決に及ぼす影響について理解できる、(2)異文化状況での意思決定・問題解決につきものの感情を経験することができる、(3)単一文化集団と様々な複数文化集団での意思決定を比較できる、(4)複数文化集団での効果的な意思決定・問題解決の方策やモデルを実践し、開発することができる、(5)異なる文化背景を持つ人々とのインターラクションを楽しむことができる、等がある。実際に参加した学生のコメントによると上記の(1)、(2)は達成できているようだ。また、(5)についても全員ではないが、達成できていると考えられる。

四、麗澤大学における国際教育支援のこれから…今後の課題

留学事前研修として始まった「異文化体験セミナー」は変容を遂げたが、現在のセミナーが十分とは私自身は思っていない。学力においても目的においても多様化する学生を受け入れていくには、このようなサービスプログラムとしてのセミナーも同時に多様化する必要があるだろうと思われる。第一期の内容のセミナープログラムをまた実施する必要性も考えられる。本学は他大学に比べて外国人留学生や留学する日本人学生の全学生数における割合は非常に高い。これを維持し、さらに発展するためには「異文化体験セミナー」の実施だけでなく、様々な課題があると思われるが、ここでは急務と思われる二つを挙げる。

(1) 帰国後の適応プログラム（Re-entry Orientation Program）

多くの学生は帰国してから適応上のオリエンテーションを何も受けず本学での学生生活に復帰するが、

留学体験で変化した自分を冷静に振り返らないまま、留学前の延長として日本に帰ってくると、自文化に対する不適応症状を起こすことがある。「留学ボケ」などと言われることがあるが、これと就職活動などが重なると、様々な場面で自分がどのような行動を期待されているかわからなくなったり、混乱してしまう。精神的に不安定になったりしてしまうこともあるので、カウンセリングの専門家との連携を考えたプログラムが必要と思われる。

(2) 国際交流の専門家職員の養成

現時点で一番限界を感じるのはこのようなセミナーを実施できる人材の不足である。国立大学では受け入れ中心ではあるが、近年留学生センターが設置され、留学担当の専門官が様々なオリエンテーションやサービスプログラムを行っている。多様な留学プログラムを抱える私立大学では国際交流センターに専門職員を配置して、受け入れ・送り出し両方を行っているところも多い。本学にも一九九八年から国際交流センターが発足し、今まで学科や学部で運営していた留学プログラムの一元化が計画されているが、必要なのは国際交流専門家の育成・配置であると思われる。教員と専門家職員とのチームワークがこれからの大学での国際教育の鍵になると思われる。

西暦二〇〇〇年を迎え、世界的にもますます教育の国際化・流動化が速まると考えられる今、これまでの実績を踏まえながらも、一歩先んじた国際教育支援体制を築いていくことが、本学にも期待される事であろう。

注

(一) ここで述べることはあくまでも筆者の私見であり、セミナーを共同開発・実施した全員の合意を得たものではないことをご了承願いたい。

(二)『エコトノス』についての詳しいことは拙著「体験学習型異文化コミュニケーション教育の試み—学生の異文化シミュレーション『エコトノス』体験の考察」麗澤大学外国語学部英語学科英米文化研究会『麗澤レヴュー』第五巻、一一九—一三〇頁参照のこと。

ドイツへの留学――その経緯と現状

外国語学部教授　奥野保明
（ドイツ語学科）

そもそもドイツの大学は、いくつかの特殊なケースを除いて、すべてが国立（州立）大学である。外国人も無料で授業を受けることができる一方、正規の学生となるには相当のドイツ語力が要求され、大学でドイツ語を学び始める日本人学生が、ドイツの大学に留学するのはそう簡単なことではない。また逆に、日本語を学ぶドイツ人学生が日本の大学に留学するに当たっても、語学力や経済面で難しい側面を抱えているのが実情である。そのような枠組みの中で、ドイツの大学と学生の留学に関する相互協定を結ぶのは、そして実際にそれを運用するのは一般になかなか容易なことではないと言えるだろう。

麗澤大学は現在、旧西独の二大学（ビーレフェルト大学、トリーア大学）、そして旧東独の二大学（イエナ大学、ハレ大学）と交流協定を結び、毎年四十名近い学生が一年ないし半年間ドイツへ留学すると同時に、ドイツから三名～五名の留学生を迎えている。麗澤大学の学生が正式にドイツに留学するようになったのは、一九八五年からであり、主として東独の大学であった。

旧東独の大学との交流

東独の大学に短期外国人留学生を受け入れる制度ができ、ハレ大学を皮切りとして、麗澤の学生が東独の大学に留学し始めたのは一九八五年である。まだベル

リンの壁が東西両ドイツを分断し、社会主義体制が厳然と存在していた時代であったが、語学力を前提とする西独とは事情が異なり、初心者にしっかりとしたドイツ語教育を施す態勢が留学先として好都合であった。

学生たちはドルでしかるべき授業料を支払ったが、東独マルクによる奨学金が支給された上、寮費や食費なども極めて安く、日本での学生生活よりも経済的負担が少ないほどであった。しかしその半面、電話もコピー機もなく、食料品の種類も限られていて、非常に不便な生活を強いられた。豊かな日本で育った若者には、その不便でつましい生活も実は大いに有意義なものであり、日本の生活を見直す又とない機会でもあった。社会主義体制の象徴でもあった、不親切でぶっきらぼうな郵便局員や駅員、ウエイトレスの対応に腹立ちを覚えると同時に、物質的貧しさの中に輝く、人々の心根の優しさと連帯感を感じ取ってきた。また、東独に留学したほとんどの学生が、先生方の優しさと忍耐強い熱意のこもった教え方に勇気づけられたことを、その「留学報告書」に認めている。

ベルリンの壁を突き崩す東独社会の大きなうねりを身をもって体験し、ドイツ統一の現場に居合わせた若者の感激は一生忘れられないものとなろう。

東独時代にはベルリン大学、ロストック大学、ワイマール建築土木大学、ドレースデン工科大学にも留学していたが、ドイツ統一と共に東独のあらゆる分野における改組と人員整理が行われ、これらの大学への留学の道は閉ざされてしまった。幸いにして、イエナ大学及びハレ大学とはそれまでの関係が深いこともあって、紆余曲折を経ながらも留学協定が維持され、発展してきた。特にイエナ大学とは一九八九年から教員交換も実施され、麗澤の教員がイエナで日本語を教える一方、イエナ大学からはドイツ語教育の専門家を麗澤に迎えている。

ドイツ統一後はじめて、イエナ大学の学生を麗澤に受け入れることも可能になった。これを機に「麗澤ドイツ友の会」が結成され、東独でお世話になった卒業生を中心に、在学生及び保護者の有志による会費や寄付を元に、日独留学生の交流にいくらかの支援がなさ

れるようになったわけである。因みに、これまでイエナ大学に留学した学生数は二三八名（英語学科の学生四名を含む）、ハレ大学へは一二三名、そしてイエナ大学から迎えたドイツ人留学生は十九名となっている。

留学先大学でも、全員コンピュータ利用のアカウントが与えられ、日ごろの連絡はほとんどEメールで行われる状況になった。東独時代とはまさに隔世の感である。

旧西独の大学との交流

麗澤大学が旧西独の大学と交流協定を結んでいるのは、ビーレフェルト大学とトリア大学の二校であるが、一九八三年四月から一年間、ハンス・ヨルク・ビーブッシュ君がビーレフェルトからの交換留学生第一号として麗澤大学別科日本語研修課程に学んだ。その後数年間は断続的な学生交換であったが、一九九二年からは定期的に一名ないし二名の交換留学が実現し、これまで、約二十名の学生がそれぞれ相手校で学んだことになる。

両大学の学生が、お互いに相手校に授業料を納める必要がなく、少額ながら奨学金をもらえるタイプの交換留学であり、限られた数の学生にしか当てはまらないものである。しかし、この交換プログラムを土台として日本研究で博士号を取得する者、ドイツ語教師への道を歩む者など、有為な若者が育っている。

旧西独のもう一つの留学提携大学であるトリーア大学とは、一九九四年に交換協定が成立した。トリーア大学日本語学科の学生、麗澤大学ドイツ語学科の学生を、それぞれ毎年五名受け入れるというものである。トリーア大学では、ドイツ語そのものの授業は他の外国人留学生と同じクラスで学び、麗澤の単位として不可欠ないくつかの科目については、特別クラスを設けてもらい、その特別授業の費用は学生が負担するという方式をとっている。留学先として希望者が一番多い大学である。

ドイツ留学で学生が学んだこと

毎年提出される「留学報告書」は、学生達の観察と

意識の変化、成長のプロセスが綴られた貴重な資料であるが、今年の報告書から生の声を少し紹介しておこう。

「他のドイツ語を学びにきている外国人、フランス人とかロシア人に、なぜあんなにドイツ語が上手なのか聞いてみたのだ。そしたら、あるモロッコ人などは、にわかに四十冊以上の分厚いノートを見せてくれた。それは、どんな動詞がどんな前置詞と組み合わさるかとか、分離動詞とかを一つ一つ、何十回も記帳したノートだった。地道な反復練習による賜物だったのだ。」

（根本　純）

「しかし留学生活は楽しいことばかりではありませんでした。自分の思っていることをうまく伝えられないとか、言われたことが理解できないという語学上の苦労があったり、外国人、アジア人だからといってばかにされたりして悔しい思いをしたりもしました。しかし、留学において私の一番の収穫は多くの友人ができたことだと思います。ドイツ人だけに限らず、他の国の学生とも交流でき、一緒にごはんを作って食べたり、映画に行ったり、誕生日を祝ったり、また日本語を勉強している友人とは定期的に会って、おたがい教え合ったり話をしたりと、本当に充実した時を過ごせたと思います。」（高岡　晶子）

「そしてもうひとつ、ヨーロッパの強い結びつきを感じたのはコソボでの戦争があったときだった。この戦争は私には他人事に思えなかった。なぜなら私の滞在している国が戦争に参加していたからだ。テレビやラジオから毎日コソボについてのニュースが流れ、コソボからの多くの難民がヨーロッパの国々に避難しているとも伝えられた。もちろんドイツにもたくさん避難者はやって来た。私自身、イタリアからミュンヘンへの夜行列車の中でコソボから逃げてきた家族に会った。何が起きているのかさえ理解できない程小さな子供までいて、本当にかわいそうだと同情することしかできなかった。」（黒澤　悦子）

「特に私が興味をひいたのは東欧諸国から来た友人たちである。私が非常に驚いたのは、彼らが自分の国、文化、民族にとても誇りを持っているということだ。授業中熱っぽく自国について語り、論争にまで発展することもしばしばあった。私が質問すると、かれらはきまって熱心に色々と説明してくれる。ほとんど私が知らなかった新しいことばかり。初めて聞いた宗教、初めて見た文字。ある国は女性の就学率がほぼゼロに等しかったり、ある国では民族独自の言語の使用が禁止されていたり、またある国は他民族による迫害がまだ続いていたり。彼らと知り合い、親しくなることによって、今までは社会科の授業の時間に開いた地図帳の中だけの存在だった国々が、一気に近い存在になったように感じた。どこかで紛争があったり、災害があったりしたとき、今までの私だったら気にはするものの、心のどこかで所詮「世界のどこかの国」の出来事、自分には直接関係ない出来事という見方をしていたような気がする。しかし、今はそれが「友人の住む国」であり、「友人が遭遇するかもしれない出来事」、「友人が抱え得る問題」なのだ。彼らには何もかもが真剣勝負なのだ。」（松岡　幸子）

東独と西独ではかなり事情が異なっていたが、ドイツで学生たちが学んだことの多くは共通している。

まずは、ドイツ人学生そして他の国々からの留学生と語り合い、彼らが明確な目的意識をもって勉学している姿に接して、自分の生き方や将来について考えさせられることである。

次に、親元を離れ、見知らぬ土地で生活をし、各地を旅行することによって、行動力を身に付けると共に精神的に自立していくことであろう。

さらには、ヨーロッパの中央に位置するドイツで初めて国境を意識し、東欧諸国を見聞して、国際社会の動きに慄然とする場合も多々ある。時には、人種差別的扱いに接し、日本人であることの意味を考えさせられたりもする。

過去のことを考え、歴史と伝統を大切にするドイツの風土と人々の暮らしを知り、戦後の日本人が置き忘

れてきたものについても教えられる。

このようなドイツ留学を触媒として、ブダペスト日本大使館やベルリン日本総領事館に奉職する者、ドイツ観光局やフランクフルトの旅行社に勤務する者をはじめ、自信と夢をもって広い世界に羽ばたく卒業生も少なくない。

最後に、交換留学生の受け入れについて一言触れておきたい。

毎年わずか数名ではあるが、ドイツ人留学生が同じキャンパス内で生活していることは、ドイツ語学科の学生にとって、非常に大きな刺激となっている。新入生の谷川オリエンテーションでの交流をはじめとして、同じ寮での生活やクラブ活動、そして「麗澤ドイツ友の会」が後ろ盾となって行われる「ドイツ語講座」やゼミ合宿は、まさに「生きた言葉」の実証と応用であり、異文化との接触、留学への下地となっている。

ドイツ人留学生の受け入れに当たっては、これまでずっと別科日本語研修課程の先生方にお世話になってきている。感謝申し上げたい。今後は、キャンパスライフ活性化のためにも、大学としての留学生受け入れ態勢をより整備し、英語圏からの交換留学生も迎え入れることを望みたい。

私たちの留学体験 ― 海外で得たもの

〝留学は人生の肥やしである〟
―アメリカでの留学生活を振り返って―

国際経済学部　国際経営学科四年　渡辺かおり

日本に帰国して八ヶ月ぶりに家族や、友達などに久しぶりに再会して、「留学どうだった?」と必ずと言っていいほど尋ねられる。私は、ただ「うん。すごく楽しかったよ。」と答える。どうだったと聞かれて一言でこの留学がどうだったかなんて語れるはずがないと私は思う。どうもこうも内容が濃すぎて、学んだ事が多すぎて語るに語れないと言うのが現実である。しかし、今、留学から帰って来て、日本での普通の生活に戻り、このような改めて自分の留学生活について振り返り、それを書き留めることによってその月日を自分なりに整理できるいいチャンスなのではないかと思った。

まず一言で言うと、本当に本当に短かった。時が経つのはなんて速いのだろうとつくづく実感した。八ヶ月と言うと一見長そうな感じがするが本当に「あっ!」と言う間だった気がする。しかし、あのドキドキ、ワクワクしながら成田空港を後にした日を思い起こすと何となくではあるが八ヶ月たったという事が感じられる気がする。私たちサンノゼ留学組は、日本を発ってサンノゼに滞在する前の二週間の間オレゴン州のBendという小さな自然あふれる町で様々なアウトドアスポーツをやっていた。この企画では、いろいろなアウトドアスポーツ(例えば、

ハイキング、マウンテンバイク、カヤッキング、リバーラフティングなど)ができて、とても楽しかったし、良い経験になった。私は、これを自ら体験することによって、心から、アメリカの自然の雄大さを感じた。

次に、本格的な寮での生活について書きたいと思う。私の友達は、ほとんどが寮の中でつくった友達である。同じ寮という事でいつも容易に会えて話ができるので、とても友達の作り易い環境だった。友達の事で書けば、留学先で本当の友達を作るということは、自分が留学に行く前に想像していたよりも難しいなという事を感じた。自分は人と打ち解けたりする事が得意なほうだと思っていたし、友達なんてすぐ作れると思っていた。しかし現実は甘くはなかった。声をかけて挨拶をするまでは簡単なのだが、その先に進むのはとても難しく感じた。会話に入ろうとしてもその背景がわからないから話についていけないし、息つくことなく話している中に乏しい英語で入っていく勇気をだすのは、なかなか難しい。この事で、始めの三ヶ月くらいは自分の状態に満足が行かずたくさん悩んだ。自分の知らない国で生活するという事は、日本で生活している時には考えることの無いことを悩み、考える。少なくとも私にとっては、毎日が冒険だったし、非常に緊張感のあるものだった。日本で生活をしていたら、人に何かを伝えることも、自分が意見を述べることも、普通に難無くこなす行為である。そんな事でも、違う国にいたら、一苦労なのだ。常に頑張っていなければならない。頑張れば頑張るほど空回りする時だって沢山ある。私は今考えると、肩に力が入り過ぎていたのではないかと思う。

私は「何で英語がこんなにできないんだ?」と自信を失っている時に、ふらりと旅行に出かけた。航空券の手配から、ホテルの予約、できない英語で必死にやった。私は、何か自分に自信が欲しかったのだろうと思う。きっと何かを独りで成し遂げることができたら、自信が持てるのではないかと。たとえそれがとても小さな事だとしても。私は、その旅行

でアメリカの西海岸から東海岸まで鉄道を利用し、横断した。フロリダからカルフォルニアまで約四日間電車に乗りっぱなしの旅だ。人間暇だと人と話したくなるもので、私はその電車の中で出会った人と沢山友達になった。みんな日本人の女の子が一人で列車に乗っていると心配して非常に親切にしてくれた。そこで出会った人は、いつもの大学の生活とは違い、本当にいろんな人がいた。普段の生活では出会うことのあまりない人に出会い、話をし、いろんな事を吸収することができた。私は、この旅行で自分に少し自信を持つことが出来、落ち込んでいる自分から脱出した。私にとって旅行とは、いつも新しい発見を与えてくれるものである。私の中の旅行の魅力は、もちろん、自分の知らない土地を訪れて、きれいな景色を見たり、街並みを見たりするということもあるが、他に、新しい人との出会いと言う事がある。私は約一ヶ月間旅行をしていたが、そこで出会って話をした人は、かなりの人数になると思う。私が旅行中に突然出会った人でもっとも印象深かかったのが、フロリダに行った時にビーチで出会った男の人で、いきなり私の前でとても高い椰子の木に素足で登り始めて何をするのかと思ったら、椰子の実を採ってくれて、それをその場で割って椰子の実ジュースを飲ませてくれた人である。そんな突拍子もない経験をする旅が私は大好きだ。さっきも述べたように、旅行中に出会う人と言うのは、思いがけない人が多い。私はそういう自分と全く違う生活を送っている人と出会い、話を聞き、自分の知らない世界を知るということがとても好きだ。

また、私が落ち込んだ時、元気を出すことができたのは、友達の力も非常に大きいと思う。たとえ、数が少なくてもいいから、親身になって考えてくれて心の支えになる友達を作ることが普段の生活でもそうではあるが、留学生活をする上では特に大事なのではないかと思う。

留学してみて、気付いた事は、日本は何て良い国なんだろうということである。アメリカに八ヶ月間住むまでは、日本とアメリカを比べてみた時に、どっ

ちかというと日本の悪いとこばかり見えたような気がする。しかし、実際に住んでみて、日本のいいところも沢山見つけることができたと思う。そして、自分はオープンな性格なので、アメリカ人の性格に似ているのかなと思っていたけれど、実際自分はとことん日本人なんだと言う事を何よりも実感した。自分が周りからどう思われているかということをやはり自分はすごく気にすると思う。アメリカ人はその点において日本人ほど過敏ではないと感じた。日本人は、自分の事よりも他人の事を思う気持ちが大きいと思った。私はよく、アメリカ人の友達に、「何でかおりはそんなに周りの事を気にするんだ。」と言われた。何で?と言われても、無意識に考えてしまうのである。それは、多分、自分が育てられた環境によるものだと思う。どこに重点を置くかと言う問題だと思う。自分か他人か。きっと、その割合が、日本人とアメリカ人では違っているのだ。私はいいところと悪いところは常に背中合わせなのではないかと思う。さっき私が述べたように、日本人が周りの事を考えると言う事は、良く言えば、他人を思いやると言う事だが、悪く言えば、自分の気持ちを押し殺すと言う事になる。すべてそうではないかと思う。私はアメリカのスーパーにびっくりした。何がビックリしたかと言うと、商品の陳列の汚さだ。例えば、果物が並んでいるとすると、林檎のかじりかけがおいてあったり、じゃがいもの中にキュウリが入っていたりきれいに包装してある商品のふたがあいて物が出ていたりとそういう事がまれにある。日本では、きれいにすべての商品が並んでいるのが普通である。こんな事からも違いが発見できる。日本人は几帳面でアメリカ人はおおざっぱだ。こう言ったらアメリカ人が悪い印象になるが、言い方を変えれば、日本は過剰包装など、几帳面すぎて時間や資源を無駄にしていると言えるし、アメリカ人は無駄なものを使わないともいえる。文化というものを良いとか悪いとかでは絶対に区切れないと思う。だからこそ、違う文化を持つもの同士がお互いに理解し合うということは難しいことであると思う。でも、

自分と違う文化を持つものと接するということは違った考え方を知る事ができてとても私は興味深い事だと思う。文化の違いで面白いなと思ったのは、笑いのツボである。アメリカ人の友達と私はいつも一緒に夜見るテレビ番組があった。それは、トークショーのようなもので、笑いをとる番組である。それで、私の友達は盛んに笑っているのだが、私はちっとも面白いと思うところではない。どこで笑うかと言う事まで違うと言うのは面白いと感じた。

最終的に自分の留学を振り返ってみて、確かにつらかった事もたくさんあった。日本で普通に生活していたら味わう事のない辛さも身に持って体験した。私は、人間というものはそういうことを経験してこそ成長して行くものだと思うので、辛かったこと、楽しかったこと、何もかも全ての事が自分の人生において勉強になったと思う。日本に帰って来てすぐは、何となく物足りなさを感じた。それは、きっとアメリカでの生活が刺激的だったのではないかと思う。その時は、辛いなと思っていたこともそれがあった事によってこそ、その倍くらい楽しいと思える事、充実していると思える事が大きかったのではないかと思う。私は、留学に行った事によって前よりも広い視野でものを見られるようになったのではないかと思う。それは、寮での友達、語学学校での友達、旅行中に出会った友達、本当にいろいろな人に出会い、またいろいろな考えを知り、いろいろなものを目で実際に見たり、耳で聞いたり、身を持って体験する事によって培われたものだと思う。そういう意味でも、私は、「留学というものは、なんて素晴らしいものなのだろう。」と思う。

以上述べた事は、本当にほんの一部である。最後に「留学とは、人生において非常に素晴らしいコヤシである。」と私は思う。こんな素晴らしい体験をさせてくれた両親にお礼を言いたい。また、自分がそんな恵まれた環境にいて幸せなんだと言う事を感謝しなければならないと思う。そして、私たちをお世話して下った先生方ありがとうございました。私は、決してこの経験をそれだけで終わらせないよう

に、これからの人生を歩んでいきたいと思う。

私の天津留学

外国語学部　中国語学科四年　高野　優紀

はじめに

「ああ、高野さん、ちょうどいいところに来た。飛んで火に入る夏の虫」

夏も終わりに近づいた頃、たまたま中国語共同研究室に立ち寄った私は、血色の良い顔に謎の笑みをたたえた松田徹先生から、突如、今回の原稿の指令をいただいたのでした。「はい、これあげる」と手渡された特大サイズのサツマイモ一本とひきかえに。

今回、「留学とは何か」というテーマで書いてほしいということですので、思い出話はほどほどに、皆様が留学を考えるのに参考にしていただけるようなものが書けたらと思っております。どうぞ最後までお付き合いくださいませ。

麗澤大学の留学制度について

現在麗澤大学では、中国語圏への留学先として、長い交流関係にある台湾の淡江大学のほかに、中国大陸の天津財経学院と天津理工学院をあわせた三箇所の大学と提携しています。私はこの留学制度を利用して、一九九八年の九月から四ヶ月間、天津財経学院で留学生活をおくりました。同じ中国語圏への留学でも、台湾と大陸では生活環境上、その特徴が大きく異なることに注意して選択する必要があります。

まず台湾留学ですが、淡江大学と麗澤の交流の歴史はもう二〇年にもなり、一年中二〇名ほどの学生が交換留学のような形でお互いの大学を行き来しています。淡江大学には日本語学科もあるため、台湾の学生と共に寮生活をしたり、とても友達ができやすく、生活にもなじみやすい環境があると聞いています。

一方、天津留学は数年前から始まったばかりで、交換留学ではなく、こちらから一方的に学生を送り

出すだけで、あちらの学生を麗澤大学で受け入れるという制度はありません。また、私たちは現地で留学生寮に住み、他の留学生（主に韓国人）と留学生向けの中国語研修プログラムの授業を受けることになっています。生活環境も、台湾のようにセブンイレブンで日本と同じようなものが手に入るわけではないし、気候も寒く乾燥していて厳しいです。天津留学のメリットは、物価が安いこと、発音が標準語に近いこと、そして良かれ悪かれ、本場の中国を肌で感じることが出来る事です。

留学期間はどちらも半年間のみで、最高一五単位まで取得可能ですが、留学中も麗澤大学に授業料を全額納入したうえで、さらに留学先の大学へも学費を支払わなければならないことや、留学先で一コマ三時間（麗大の倍）の中国語の授業を五コマとっても、やはりこちらの五コマ分の単位しか認められないなど、なかなか融通が利かないと思うこともありました。

天津留学を選んだ動機と留学の目的

留学の目的は何か。やはり第一に「言語の習得」。私は、言葉というものは本来、学問ではなく、生活と密着した「生きるためのツール」の一つなのだと考えています。「勉強」を通し、文章の組み立て方、発音の仕方を知っていても、口から言葉が出てこない、使えないという状態は、言葉が「勉強」の域から抜け出せず、「生活」の域から離れてしまっている状態ではないかと思います。ですから、現地での生活を通して、いままで「勉強」としてこなしていた作業が、自分の「生活の一部」になるということが、留学のメリットだと思います。

しかし、留学に行かなくても努力しだいでは、日本国内でも外国語を習得することは可能であると思います。ちょうど麗澤には台湾からの留学生がたくさんいるので、彼らと会話練習をすると、とても楽しく勉強になるし、台湾が日本ととても近い関係にあることを感じることが出来ます。

ところで、留学前の私が、どうしても日本国内で

の学習だけでは越えられないと思った壁、それが「体験を通しての理解」です。留学前の私は、よく新聞やテレビなどで、在日中国人の犯罪や、戦後問題などに関する報道を見るたびに、何とも言いようのない不安や憤りを感じていました。自分は生涯をかけて中国と関わっていきたいと思っているのに、中国人は果たして日本に対しどのように感じているのだろうか？　特に私と同年代の人たちは、どのような考えを持って暮らし、どのように私と接するのだろうか？それはいくら本を読んでも、いくら中国語が上達しても、体験なしでは理解し得ないことではないでしょうか。歴史的にも文化的にも日本と深くかかわってきた隣の大国、中国。わたしは留学前まで、二年半も中国語の学習をしたにもかかわらず、中国に対してわからないことばかりで、「未知の世界」というイメージでしかとらえることができず、戸惑いを感じていました。麗澤には中国からの先生や留学生もいるにはいますが、私と同じ年代で気軽に話せる友達がほしいと思っても、その数はけっして多くありません。それよりむしろ、在日中国人ではない、現地中国人の生の声が聞きたい。実際に中国に行って自分の目で見てきたい、肌で感じてきたい。私はそんな動機で、居心地の良い台湾よりも、未知なる中国大陸へ留学を決意したのでした。

天津での生活と言葉の上達

天津での新生活は、意外にも私にとって居心地の良いものでした。留学生寮は比較的新しくきれいで、二人一部屋の各部屋にシャワー、トイレ、洗面所がついています。それぞれベッド、机、椅子、かぎ付のクロゼットが二つずつそろっています。保証金を払うとテレビを借りることができます。四階建ての一階には食堂や洗濯室、二階三階に留学生の部屋、四階が教室になっているため、ほとんど外に出ることなく生活できてしまいます。

始めは慣れない環境で生活していくことにエネルギーを使うので、何もしていなくても疲れます。特に言葉の問題が大きいです。日本では自分の思った

ことや感じたことを難なく言葉にして表現しているのですが、留学を境に突然、自分の気持ちをうまく相手に伝えられなくなったり、相手の言っていることさえよくわからないという状況になります。このような事態は留学前から覚悟していても、実際には予想以上にストレスです。しかし、誰にでも適応能力があるので、遅かれ早かれ、必ず新しい環境に適応できるはずです。慣れてくると、相手の話が聞き取れないことも、自分の話がうまく伝わらないことも、さほどのストレスではなくなります。その時やっと、中国語が自分の生活に溶け込んできて、語学力が急速に伸びるように思います。それまでにかかる時間が人によって違うようですが、私は以前にも英語圏に留学した経験があったので、スイッチの切り替えがスムーズにでき、一週間ほどで中国の生活になじむことができました。なかなか口から出てこなかった言葉が、間違えつつもどんどん飛び出してくるようになったのはこの頃からです。一方、留学が初めての人はエンジンがかかるのに一ヶ月前後かかったように見うけられます。

ここで少し、天津留学、しいては集団留学のデメリットについてふれておきたいと思います。先ほどふれたように、留学の始めのうちは、がんばって話しても、日本で生活していた時の半分も、満足に自己表現できない欲求不満に陥ります。そんな時、人間は、言葉の通じる者同士でその分を補いたくなるようで、毎日日本語を話さずにはいられない、結局は言葉の通じない人とのぎこちない空間より、日本人同士の気楽な空間のほうが、ずっと安らげると感じて、甘えてしまうことが多いように思います。特に天津留学では、外に出ないで生活できてしまう環境があるため、限られた人としか接せず、世界が狭くなり、だらけてしまいがちです。

留学中の成績は日本ではまったく反映されません。合格ラインでありさえすれば、評価はAともBともつかず、履修科目名と単位数のみが成績表に残ります。留学をどう過ごすかは本当に自分の気持ち次第ということになります。以上のことは中国留学のみ

ならず、その他の国への留学についても言えることではないでしょうか。

私は留学先で他の日本人とつきあうことを否定しているのではありません。現に私が落ち込んでいたとき、温かくサポートしてくれたのは、まぎれもなく日本人の友人たちでした。彼らはいつも「見放さず、つきまとわず」、留学という枠を越えて、私に人間関係や人生を考えさせてくれました。留学中だから日本人とは交流しないとか、絶対日本語を話さないという行動は視野が狭いのではないかと思います。やはり人と人ですから、留学とは関係なく、友達や人間関係は大切にするべきです。ただ、自分の目的は明確に持って、けじめをつけなければならない、ということです。もしこれから留学を考えている人がいましたら、ぜひしっかり問題意識をもって良い留学をしてきてほしいと思います。

私が留学で得たもの

さて、「中国を肌で感じてきたい！」という私の留学の目的は達成されたのでしょうか？

はい。私なりの答えを見つけてきたつもりです。留学前の不安とはウラハラに、私が目の当たりにしたものは、いつでも友人宅にお邪魔してご飯をご馳走になれる遠慮のいらない人間関係、混沌とした社会の変化の中でも、人とのかかわりを大切にする心温かい中国人の姿でした。心を開いて積極的に外に出て行けば、友達はいつでもどこでもできるものなのですね。私の希望で、英語の授業は中国人のクラスに飛び入り参加させてもらったのですが、彼らは外国人に興味を示す一方、決して私をよそ者扱いせず、仲間として輪に入れてくれることにとても感動しました。食堂でも、電車の中でも、街角でも、いろんなところで人との出会い、ふれあいがありました。その思い出話はここにはもう書ききれません。中国は広いので、中国の全国各地がこのようだとは言えないのですが、少なくとも、私の出会った中国人が、私の想像していたのよりも温かいこと、そして一三億の人民が、急激な変貌を遂げようとしてい

る現代中国で一生懸命に生きていることは、ひしひしと肌で感じることが出来ました。真冬には河をも凍りつく厳しい寒さと、鼻毛がのびてしまうほどほこりっぽかった空気も、今となっては全てが懐かしく思い出されます。

最後に、私が現地での生活を通して得たと思われるものを紹介します。

＊「親しみ・愛着→友情→人脈（？）」
＊「一定の理解と安心感」
＊「人付き合いのカギ」（マスターキーはまだ見つからないけど）
＊「私は世界中どこに行ってもやっていける！という自信」
＊ 忘れちゃいけない「日常会話程度の語学力」

貴重なイギリス留学体験を通して

国際経済学部　国際経営学科四年　新保　朋也

僕はこの体験記の中でイギリスでの生活から感じたこと、大学での授業のあり方とその為の語学能力、そして何気ないところから自分が学んだ体験を通して、留学とは何か、留学で得られるものとは何かということを書いていきたいと思います。

僕はイギリスのコヴェントリーに八ヶ月間留学しました。コヴェントリーはイングランドのちょうど真ん中にあり、ロンドンへも電車で一時間半で行け、他の有名な町も近い便利な町です。街の中心には教会、大学、色々な店がありました。路上では声を張り上げて新聞や雑誌を売る人達、楽器を弾く人達がいていつもにぎやかでした。日本の場合たいてい駅の周りが栄えますが、イギリスの場合、街の中心にはいつも教会があるように思われます。

イギリスに着いたその日からホストファミリーと

の生活が始まりました。普段は父親のミックがアイルランドに単身赴任をしているので、母親のトリッシュと、その息子ダニー（九歳）とタイ人の留学生、サンディーと暮らしていました。トリッシュは僕にとって母親というよりは友達のような人で、悩み事などはいつも聞いてくれ、毎日二時間も三時間も話を聞いてくれたりアドバイスをくれたりしてくれました。そんな時もあれば、夜になると子供をベビーシッターに預け、自分は友達とパブへ行き、楽しいひとときを過ごす。僕は彼らと住んでみてイギリスの親達は自分の時間を大切にするなと思いました。他にも家族とは違う他人と八ヶ月間暮らしていく中でやはり考え方の違いなども出てきます。そんな中でどう相手の意見を受け入れて、どう自分の意見を相手に伝えるかというのは、学校の勉強よりも勉強になった一つです。一緒に暮らしたサンディーは同じ境遇にいる者同士として助け合うことができ本当に良かったです。そして思った以上にタイの人達は日本について詳しいのに驚きました。逆に僕はタイのことは全く知らぬ上、アジアについてもよく知らなかったので恥ずかしい思いをしました。

ミックがアイルランドに単身赴任しているというのもあり、一〇日間遊びに行きました。アザラシがいるほどとてもきれいな海に面した町にミックは住んでいました。アイルランド人は友好的で親切な人がたくさんいたように思います。街を歩いているだけで地元の人と仲良くなれたり、ヒッチハイクをしてみるとすぐに乗せてくれる人がいました。夜にはミックが同僚と一緒に僕をパブへ連れていってくれて友達や従業員を僕に紹介してくれました。Guinnessとのlovelyな出会いもありました。そこで出会った一人の青年は、日本が大好きらしく熱心に話しをしたり聞いたりしてくれて嬉しくなっていた自分を思い出します。自分が日本人だということに改めて実感した時でした。しかしある時バスに乗っていると「なんで中国人がいるんだ？」と嫌そうに話す若者もいました。日本人だと実感する以上に自分はアジア人なのだと初めて気づき、アジア人がいる

ことを歓迎しない人もいるのだと分かりました。一日だけ僕はミックの大工仕事を手伝いました。アイルランドの家はレンガでできています。レンガの家を作る作業は思った以上に大変で危険な作業でした。しかし普通の留学では得られない体験を沢山得られたのがとても良かったです。

正規の大学の授業が始まる前に麗澤生のための授業が約一ヶ月ありました。その授業に納得がいかず先生方にもっと授業はこうして欲しいと尋ね、授業をもっと効率の良いものにしようと努力していました。留学してからは、自分の意見をしっかり言うことを目標としました。今思えば、頑張ろうという気持ちが空回りしていたように感じますが、結果的にその授業では正規の授業や将来に役立つものを沢山学べました。

正規の授業の特に前期は聞くことで精一杯でした。グループ分けをし、その中で何か意見を言わなければならないところでも、イギリス人の会話が早く、意見を言おうという頃には次の問題について周りの学生は話していました。英語が第二外国語の学生だけのグループの時でも自分の意見に自信がなく発言できなかった自分に憤りを感じていました。後期の授業は色々困難なことがありましたが、システム的にはとても素晴らしく今まで習ったことが自然に身につき、それを応用してケイススタディなどに使えたのは将来の自分の為に直に役に立つものだと思います。日本と違いイギリスの授業は教授と学生が一体となって行なっていたため、授業に毎回やりがいを感じることが出来ました。ただ不満が全て消えたわけではありませんでしたが、足りないものをいつも嘆くのではなく、持てるものを最大限に活用しようと努力しました。

他にも趣味の不一致などが重なり友達を作るのに自信がない時期さえありました。それによって自分がどれだけ柔軟な考えができない頭の固い人間か思い知りました。そんな中でもとても仲良くなれた友達ができました。友達ができると国や人種が違っても同じ人間だと実感することができました。授業が

終れば図書館に行ったり映画を見たりパブに行ったりし、友達との関係をより深いものにしていきました。友達とサッカーをよく見ていたのですが、ある時スタジアムの関係者が事故で亡くなり、観客全員で黙とうを捧げた時のあの静けさ。イギリス人の国民性に感動しました。日本で出来るかどうか僕には自信がありません。

八ヶ月の間一緒に過ごした麗大生の友達には感謝しています。たまにはover-cohesiveのときもあったり、意見が合わなかったりもしたけど、色々な問題がある中助け合っていけて本当に良かった。楽しいとき、苦しいときに一緒にいた仲間だから日本に帰ってきた今でも仲が良いのは本当に嬉しいです。特に男二人から学ぶべきところはたくさんありました。

ホストファミリーはもう僕の家族です。兄貴のように慕ってくれたダニー、いつも人生について熱心に語ってくれたミック、そしていつも僕を自分の子供のように心配してくれたトリッシュ。「本当にあなた達と会えて幸運だった。」と言ったのに対し、「私たちもあなたに会えて幸運だったわ。あなたは私たちの息子よ。」と言ってくれたのを僕は一生忘れません。彼らはいつも僕に言っていました。「幸せになりなさい。もし困っている人がいたら助けてあげて。みんな人は助け合いながら生きているのだから。」今それが自分の体験からよくわかります。

これから留学に行こうと思っている人達へのアドバイスになればいいのですが僕が感じたいくつかやっておいたほうが良いものを書いていきたいと思います。

どんな時でも感じたのはやはり英語が出来ないと困るということです。留学に行く前にはしっかりと文法や単語を覚えていったほうが何倍も留学が楽しくなります。僕はそれをきちんとやっていなかったので、留学中にやらなければなりませんでした。この時間を授業のことに使えたらもっと留学が楽しくなっていたでしょう。

僕はどんな所でも写真を撮っていました。それと

テープレコーダーは講義の為ではなく私生活の何気ない会話、路上での音楽を録音していました。各国で色々な言葉を吹き込んでもらって覚えたりしました。あの時のあの人の声、音楽。かけがえのない僕の宝物です。

休み期間などは旅行に出かけてください。そこでまた色々な体験が出来ます。僕は友達の家を中心にヨーロッパを回りました。行く国々に友達がいるということはとても素晴らしいことで、観光とは違うその国の生活の雰囲気を地域地域で肌で舌で感じることができました。普段の休日には好きなことをやってください。勉強するのも良いのですが、僕の場合、よくロンドンに行ってミュージカルを見ました。他にも自分の好きなバンドを初めて生で見て感激したりしました。そういう経験も自分の知識を広げる上で大切なものです。

この留学を決めること自体、僕にとってはかなり決心のいるものでした。なぜなら大学生活の中で色々な活動をして充実していたからです。特に今まで一緒に目標に向かって頑張っていたバンドのメンバーと八ヶ月離れることによって、多大な迷惑をかけることが分かっていました。それでも留学することをお勧めします。何故留学したい？　と聞かれ「英語力の向上・自己再発見」と答えていました。はたしてそれができるのか、そしてそれが本当の目的なのか、疑問を抱いたまま日本を発ちました。

今こうして留学から帰ってきて感じるのは、留学というのは英語上達だけでなく、他の人や文化とを比較し、感じ、考えることによって、自分の知らない自分を良い意味でも悪い意味でも痛いほど知ることや、人との出会いの大切さ、助け合うことの重要さ、たくさんの困難の中でどう生きていくかなどを学ぶ一つのいい機会だということです。日本にいるだけでは見えないものが沢山見えるようになります。そして留学を成功させるには準備をきちんとすることと、留学後に自分が経験したことをこれからの自分に最大限に利用することだと思います。

最後に、一緒に行った麗大生、セドリック、リー、ジュード、アンドレアス、ジミ、グレッグ、など僕の留学を何倍も楽しくしてくれた仲間達、メグを初めとする先生方、留学委員会の方々、そして僕の祖母、兄、両親に深く感謝の気持ちを伝えたいと思います。

本当にこんな素晴らしい経験をさせてくれてどうもありがとうございました。これからも勝負だと思っています。この経験を生かし頑張ります。また迷惑をかけてしまうと思いますが、よろしくお願いします。

私たちの留学体験 ― 日本で得たもの

自分にとっての留学

言語教育研究科　日本語教育学専攻
博士後期課程二年　カンハー・ソーパー（タイ）

日本に留学することによって、私はすばらしい体験をし、また自分の国を客観的に見ることができました。

日本に来て、自分の国を客観的に見ることは、国を発展させるためには欠かせないことだと思います。例えば、タイでは、授業中に質問や意見があっても先生に直接話すことは少ないです。学生からのコミュニケーションが少ないということは、タイでは一般的です。しかし、日本に留学して様々な国の人と一緒に勉強してみると、授業中でもいろんな質問や意見があり、先生にとっても授業を行いやすく、学生にとっても役に立ちます。このような勉強の仕方を客観的に考えると、タイの勉強は、悪い言い方をすれば、先生が何か言ったらそのとおりに鵜呑みにするというものではないかと思います。

タイの教育のように教師主導の主観的な見方だけでは足りなく、学生間の客観的な見方をとりこむと、どこが間違っているのか、どのように解決したらいいのかということがもっと見えてくるのではないかと思います。私にとっての留学の意義もこの点にあると思います。

留学で得るもの

留学して、友達や異文化理解や知識が広がるとい

う面はもちろんありました。しかし、日本に来て自分が強く感じたことは、自分の国をもっと好きになったことです。

日本に来る前に、いつでもあるから、なくなったら買えばいいと思い、食べ物などをあまり大切にしませんでした。タイ語の本を買っても、いつでも読めるからと、読みませんでした。しかし、日本に来てからタイの料理の材料や本がなく、入手することでさえ大変でした。当たり前と思っていたことが非常に貴重なものということが分かりました。

また、麗澤大学のタイ語授業のグループは、タイ語を勉強して、麗陵際でもタイのことを紹介してくれました。また、私の指導教官は、母国語ではないのに、中国やタイにまで出向かれ、言語調査をしてくださり大変ありがたく思っております。

自分の国ではないのに好きになっていただき、大切にしてもらい、これから私達も日本や他の国を大切にするべきだと改めて思います。どうもありがとうございます。

異文化体験 ―食文化―

タイ人が、最も驚くことの一つとして食文化の違いが挙げられると思います。基本的な調味料として、タイは、ナンプラー、唐辛子（プリック）、タクライ、ハーブなどであるのに対して、日本は、醤油を中心に味噌、塩、砂糖などであります。タイ語でナンプラーという意味は、ナンは水、プラーは魚のことです。日本語では、「魚から出た水」ということで、魚醤油の一種です。

ところで、よくタイ人が、日本食を食べた感想として、味がない、醤油の匂いが臭いなど、日本人の味覚と比べて違いが明らかです。逆に、私の日本人の友達に、タイ料理を食べての感想を聞くと、匂いが強い、ナンプラーの匂いがどうしても食べられない、辛いなど、私たちタイ人が思いもかけなかった感想がでることが多いです。また私も、ナンプラーを使いきってしまったときに、ナンプラーではなく醤油を作って料理を作ると味が変で全然おいしくありませんでした。やはりナンプラーの味が、私の味

覚であって、醤油ではないと思います。

よく三歳までの味覚が人の一生の味を決めるということは、私の経験からも本当だと思います。タイに来ている日本人が、醤油を手放せないのも同じ理由であると思われます。個人にとって、食べ物の味、食文化というものは、生活の基本であり重要であることがわかります。

多くのタイ人や、日本人は、日本の食文化の基本的な味付けである醤油とタイの食文化の基本的な味付けであるナンプラーは、それぞれ日本特有の物であり、タイ特有の物であると考えていると思います。しかし、実は、秋田県の郷土料理であるしょっつる、能登半島のイシリ、香川のイカナゴ醤油などに見られるように魚醤油は日本に存在しています。この点では日本とタイとは共通性を持っています。

授業との結びつき

私は、日本語教師としての経験から、生徒の誤用の原因を探り、タイ語と日本語の異同を明らかにし、日本語の背景にある日本文化を理解させながら教えることが効果的ではないかと痛感しました。麗澤大学では、言語の授業科目はもちろん、日本語とタイ語の対照言語学研究や興味を持っている対照文化研究の授業も充実しているところに魅力を感じています。

研究終了後は、研究者として帰国し、引き続きタイ語と日本語の個別性、共通性、普遍性を追求しながら、タイの日本語教育の発展に貢献したいと思います。

留学は人生そのものだ

国際経済学部　国際経営学科卒業生（平成十二年三月）
劉　怡（中国）

振り返ってみると私の留学生活は大きく三つに分かれます。

〈積極的に国際交流活動へ――形式だけの国際交流を超えて〉

麗澤大学の国際交流活動は非常に盛んで、毎年四

月の留学生懇親会をはじめ、一年中留学生のための色々な活動があります。私はそれに参加して留学生同士のつながり、日本人の学生との交流を深め、和やかな気持ちで留学生活を送ることができました。

その他、学校外の地域住民達との交流機会にも恵まれました。別科生の時からあちらこちらで中国事情の紹介、中国料理の披露、中国語講師の担当など積極的に交流活動に参加しました。私にとって日本人の考え方、日本社会の理解をするための良いチャンスでした。

しかし、このような交流活動は、楽しいことばかりではないことに気づき始めました。外国人に対しある種の誤解あるいは偏見が日本人にあるように思えました。これを取り除くには、表面的な交流や外交辞令だけのやりとりでは無理な面があります。お互いに真心を込めての心のぶつかり合いが必要です。

私の経験によると、日本人の外国人に対する態度には五つのタイプがあります。一番有り難いタイプは、誠心誠意外国人と友達になりたいタイプです。次がただの好奇心を持つタイプ、どうでもいいと考えているタイプ及び外国人なんて嫌いというタイプです。これらのタイプの違う人達と付き合う時、それぞれに、知りたいこと、無関心な点、嫌いな所などを理解しお互いに努力すれば、きっとプラスの方向に向かうでしょう。最も困るタイプは、心の中に外国人、特に欧米人以外の外国人を軽蔑しているのにそれを表に出さない人です。言うまでもなく、このタイプの日本人との交流は、お互いに良い思い出を残せないでしょう。

外の世界を知らなくても一生を終えた人はたくさんいます。私達のような留学生はやはり〝外〟の世界を経験したくて、〝他所〟の素晴らしい思想、知識を身につけたくて外国にやってきました。そのため限られた時間を十分利用して、たくさんの人々との触れ合いを望んでいます。

〈堀出ゼミでの勉強——英語能力ゼロを超えて〉

堀出先生のゼミの研究テーマは企業経営とマーケティングです。たとえ時代がどんなに変わっても、

どこの国に行ってもマーケティングの基本は変わることないでしょう。

先生はマーケティングの理論とご自身の何十年間のマーケティング経験を結合させながら、授業を展開されています。私にとって大変貴重な勉強時間となります。しかしゼミでの勉強は厳しいです。最新のマーケティングの動向を勉強するため、英語専門書を読まなければなりません。自分の英語能力はゼロに近いです。英語の専門書本文の内容をうまく理解できなければ、要約して皆の前で発表するのはとても無理です。英語と日本語の転換は大変難しい作業ですが、英語の分からない中国人の私にとってより難しくなります。時々感情的になることもありました。何で日本で英語を勉強しなければいけないわけ……？　冷静に考えると自分が日本から世界へ羽ばたくその目標があるから、どうしても英語をマスターする必要があるので、確かに苦労をしましたが、毎回発表が終わったとき、一生懸命勉強した充実感が溢れ、自分が目標へ近づいていることを実感できました。

＜就職活動――社会への壁を超えて＞

就職活動は日本の企業を知る絶好のチャンスです。学校での勉強や、友好交流活動など学生の立場では、まだまだ日本社会に入っているというリアリティは薄いと感じたため、日本の企業に就職しようと決めました。日本と中国、二つの国にとっても役立つような仕事につきたいと考えていました。

最初は自分が行きたい業種の企業説明会だけ申込んでいたのですが、かなり選択の道が狭くまた自分のやりたいことが分からなくなってしまい、随分悩みました。就職部の先生からアドバイスをいただき、可能性がある全ての企業にアタックしてみたり、友人が紹介してくれた『面接の達人』を読んだり、効率的にできるだけ多くの会社を回りました。最初は自信を喪失してしまいましたが、ほかの学生達のやる気を感じたりしているうちに、再びやる気が起こり、就職活動を楽しむようになりました。内定をいただいたのもそんな時でした。やはり就職活動を楽

しく感じないとなかなか内定はでないかもしれません。

留学して日本での五年間の日々ははっきりと頭の中に浮かんできます。入学式は昨日のことのようです。失敗した時、挫けた時を決して忘れることなく、教訓として自分を鞭撻(べんたつ)し、成長していきます。

留学は人生と全く同じで、人生そのものでした。

人間にはすごい適応力がある

外国語学部　日本語学科卒業生（平成十二年三月）
游　期斐（台湾）

「どうして日本へ留学に来ましたか」と聞かれたことのない留学生はいないと思います。もちろん私も例外ではありません。私の場合は商業学校を卒業後、進学志望が強かったのですが、経済的な理由でやむを得ずに就職を選びました。会社に勤め、平凡な生活を送るのは、一人の女性にとっていいのではないかと思う人もいるかもしれません。しかし、そのような生活を送っている私は常に悩んでいました。自分は一体何のために頑張っているのか、自分の生き甲斐、目標は何なのかと思い悩みました。結論としてはやはりもっと勉強したい、もっと充実したいと思い、コンピュータと日本語を学び始めました。

日本語を学んだ後、ある機会に恵まれ、先生の紹介により、日本語学校でコンピュータに関する仕事を始めました。それをきっかけとして、日本語教師という仕事の世界に出会いました。

毎日いきいきしている先生方の姿を見て、とても羨ましかったです。自分もこのような仕事をしたいなあと強く思いました。しかし、留学するなんて考えたこともなかったです。ずっと羨ましく思っていた私は、ある日突然悟るように思いつきました。自分は一体何を待っているのか、チャンスが空からでも落ちてくるのか、人生のもっとも輝いている時に頑張らなければ、いつ頑張るのかと思い、留学する

ことに決めました。

もちろん、最初は家族に反対されました。こんな年になってから留学するなんて、自分も信じられないくらいです。しかし、その強い願望は十八歳の時のようには押さえられませんでした。今度こそ最後のチャンスだと自分に言い続けました。そこで、「ここ数年間で貯めたお金でちょうど一年分の費用を納めることができるので、一年でもいいから行かせてください」と親に相談したら、「いいのよ。本当にそんなに勉強したければ、一年間ではなく、五年間で大学卒業証書を持って帰ってきなさい」と言われました。こうして、家族の支持を得て、念願の留学が決まりました。

ところが、人生って甘くないですね。のんきな私は留学だといって、勉強することしか考えていませんでした。親元から離れたことのない私にはこれが試練の始まりだということが日本に着いた次の日から分かりました。気温の差のせいか熱を出してしまい、その上にホームシックで、本当に大変でした。五年どころか、一日もいられないと思いました。しかし、親との約束、そして自分の言い出したことをどうしても守りたかったのです。

幸い、学校の寮に入って、一人ぼっちの寂しさを少しずつ和らげることができました。しかし、言葉の違いで、自分の言いたいことがうまく言えなくて、誤解されたこともありました。戸惑ったり、不満を感じたりすることもありました。しかし、人間の適応力というのはすごいものですね。「住めば都」ということが今になってつくづくと感じられます。

時々国際交流活動で「異文化体験」について話して下さいと言われても、なかなか思い浮かびません。それはすっかり日本の生活に慣れてしまい、外国に住んでいるという違和感を感じないからです。確かに習慣や考え方などは違っています。しかし、理解し合う気持ちで接すれば、うまくいかないことはないと思います。友達だって、性格の違う人もたくさんいるでしょう。それと同じです。

大学に入ってから、日本人の学生と一緒に勉強す

るようになりました。私の経験から言うと、何かについて討論する時にはいつも外国人の意見が求められました。時々どうして日本人は自分の意見を言わないのかと思いました。何回か経験したあと、こちらの方から質問するようにしてみると、意外に討論がスムーズになり、いい意見も聞かせてもらいました。「そうなんだ、自分から積極的に聞けばいいんだ」と気付きました。おかげ様で、今では何人かのいい友達もできました。

外国で文化の違いで困ったりすることが誰にでもあるはずです。嫌になって国へ帰ってしまったりする人もいれば、それを理解して柔らかく対応し、その中の面白さを味わう人もいます。いい思い出になるか、嫌な思い出になるかは本人次第だと思います。

この五年に近い歳月が自分にとって、今までの最高の一時（ひととき）でした。ここで勉強ができただけでなく、今までと違った世界でいろいろな体験ができて、世界は広く自分は小さいということもあらためて感じました。確かに困ったり、悩んだりすることもありましたが、そのようなことがあったからこそ反省することができ、以前より強い自分になれました。日本でたくさんのいい人と出会って、お世話になって、助けていただいて、感謝の気持ちでいっぱいです。卒業が近づき、とても淋しく感じていますが、またいつか皆さんとお会いできると信じています。それでは、みなさん、お元気で！

表現できないほど多くのものを得た

外国語学部　日本語学科卒業生（平成十二年三月）
崔　慶植（韓国）

私が日本に来たのは一九九四年十月二十日である。日本に来る前まではすごく緊張し、来る前日はほとんど眠れなかった。日本に到着してから、東京に向かう電車の中から広がる日本の田舎の風景は、私の緊張した心をほぐしてくれた。

私が日本に来るようになったのは、日本で働いて

いた姉からの誘いで、私自身日本に興味があったので通っていた大学をやめて日本に来た。普通の人は何かを勉強するために来るのであろうが、私はお金をかせぐ目的で来た。しかし、日本語が話せなかったので、まずは日本語から学ぶことにした。日本語学校に通いながら、バイトもしたが、疲れたというよりは、すべてが新鮮でおもしろかった。

一年ほどすぎた頃、姉が韓国に帰ってしまった。姉が帰ってから私の目標が変わった。

お金もいいけど勉強が先だと思い、勉強しているうちに日本語がだんだんおもしろくなってきて、大学への進学を考えるようになって、日本語学科に入った。本学を選んだのは他大学と違った教え方をするということで評判がよかったので、ここならいいと思って受けたのだ。

しかし、大学に入った当時はとまどいもあった。ほんとうにこれでよかったかなと。僕がやりたかったのは韓国で専攻した理工系である土木であったが、実力が足りなかったこともあって専攻を変えざるを得なかった。だが、日本語がきらいというわけではない。時にはとまどったり、後悔したりすることもあったが、私は日本に呼んでくれた姉には感謝している。今でも感謝の気持ちは忘れていない。

なぜなら、日本に来て得たものはすごく多かったからだ。書きたいものが多くて困るくらいだ。いくつかあげよう。

まず、日本語を専攻しているので、韓国語についてもいろいろ勉強することが多い。韓国ではあまり感じることのなかった、韓国語がとてもすばらしいことに誇りを持つようになった。そして、韓国では一度もやってみたことのない〝サムルノリ〟という韓国の伝統楽器を習った。習ったサムルノリを、大学祭や伝統の日そして他のところで叩いて、多くの人に見せた。

また、小学生との交流で、いろんなことを話した。私の国の説明や言葉や文字まで説明した。文字を小学生たちに教えてあげて自分達で名前を書けるようになった。児童達が書いた名前を見て発音してあげ

たり直してあげたりした。戦争についていろんな資料を集めて、客観的に討論しあう六年生の授業を見て、充実した内容であったと思ったし、新時代の風がふいてきたのではないかと感動した。このような討論や勉強をもっと広げてほしいと思っている。

麗大で学んでよかったこととしては、留学生が多いので、いろんな国からの人々がいて、その人々と友達になり、一緒に学んだり食べたりしたことだ。これも私には大事なものであり、私が日本に来ていなかったら、いや留学していなかったら味わうことができなかったろう。

日本人の考え方や文化、そして人との接し方を少しはわかってきた。こういったものが私にあれば韓国に帰って職についたり、店を開いても絶対うまくやれると思うし、自信もある。お金もかせげず、勉強も思う存分できていないけれど、私にとっては数え切れないほど、いろんなことを学んだと思っている。

私は今年三月には卒業するが、私は私なりに一生懸命やったと思う。

留学生活は忙しく、辛いものだが、自分の体は自分が守って、そして少しだけでも時間をあけて、日本の文化や友達そしていろんなものを学び合って、より充実した留学生活になれるよう留学生のみなさんに願うものである。

日本 ― それは唯一無二の国

別科特別聴講生　ファルク・マインハルト
（イェーナ・フリードリヒ・シラー大学在学中）

ドイツ人交換留学生が日本に対する自分たちの印象を文章にするという試みは良い伝統になってきた。私はここで、日本の国、人々、文化は、自分たちとはまったく違うと誤解してきたことについて述べようと思う。これに触れることの難しさは誰もが認めざるを得ないはずであろう。私は今現在、日本に七ヶ月間滞在している。私の場合この七ヶ月の滞在は、

いったい何が「家にいる」のと違うのかを説明することがより困難になってしまった。

私は昨年三月三十一日に日本に降り立った。私にとって二回目の日本である。そのため、私は「日本での日常」というものにとても早く馴染んでしまい、「信じられない、私は今、日本にいるんだ！」という感激はすぐに消えた。東京という街を電車で通り抜けているときでさえ、私はそれが当たり前の出来事のように思えるほど、すばやく溶け込んでいった。誰しもこの日本という国での多くの物事を自然なものとして思えるようになった後は、実に多くのよい評価をするようになるものである。私は当然のこととして、日本と南柏は私にとって「家にいる」のと同じになったと言うことができる。しかし、具体的に何がここでの生活を特別で快適なものにしたのだろうか。

それは多くのことが絡み合ったものであり、それを解きほぐすにはしばらく時間が必要である。そこで、ここでは、私の経験した日本でのみできる経験について述べてみよう。

それは確か四ヶ月前のことであった。私は午前四時くらいに台湾から来た留学生の友達と飲んだ帰りに、南柏の駅のそばを通り過ぎようとした。その時その台湾人の友人が、この夜更けの時間にもかかわらず、まだ何か食べたいと言いだしたので、ある軽食のできる屋台で何か食べることにしたのだ。その屋台はテントとキャンプ用のいすしか置いてないものであったが、私たちはそのキャンプ用のいすに腰をおろした。そしてすぐに、私たちが来る前からそこにいた先客に気づいた。一人は、暖かい夜だったので軽装をしている三五歳くらいの男性、そしてもう一人は若い男性だ。彼らは座ってその屋台の店主と楽しく歓談していた。私は、その男性の腕、肩、背中に大きな刺青がほどこされているに違いないことがわかった。彼の小さめのTシャツの袖や裾から見えているのである。それを見て、私はすぐに「YAKUZA」という言葉が、頭の中に浮かんだ。日本に興味がある誰しもが、その関係の映画を観てい

るわけではないが、「ＹＡＫＵＺＡ」や「ブラックレイン」は、とても有名である。私たちが注文をした後で、彼はすぐに私たちに質問してきた。

どこから来たのであるかとか、日本で何をしたいのかとか、という質問に対して私は、自分はドイツ人で、ドイツでは法律を学び、今、日本で日本語を学んでいるという旨を伝えた。彼は、私の答えを聞いて、「法と秩序」や彼の「仕事」であろうと思われることについて話し始めるが、その時私は、彼の左手の小指がないことに気づいたのだ。そしてそのことは私の彼に対する印象をより強烈なものにした。けれども私たちの会話はどんどん進み、彼の話は私にとっては信じられないことばかりで、私は驚きを隠せなかった。

私にとっては、リラックスできないしあまり居心地の良い雰囲気とは言えないが、その屋台の店主も巻きこんで、私たちは、日本の文化やドイツのことなどを語り合った。そしてとうとう私は、自分が将来就くであろう職業と彼の職業の両方を念頭に入れて、少し彼の職業について聞きたいと彼に言ってみた。すると彼は、笑い出して、次に私の混乱した頭を整理できるようにと、彼の詰めた左手の小指を私に良く見えるように差し出すのだ。そのようにしばらくの間、私たちは楽しく語り合い、その後に、私は彼の刺青のことを話題に挙げると、彼は、ためらいもせず少しの間だけＴシャツを脱いで、背中と腕に彫られている刺青を見せてくれた。彼は、とても喜んで私にその刺青の模様の説明をしてくれた。蛇を通して龍を説明した話は、そこに描写された様々な苦痛にまでに及んだ。当然のことながら、私にとってはすべてが興味深いものであり、刺青についてより多くのことを知りたいという好奇心でいっぱいであった。なぜなら私はそのような本物の刺青を今まで一度も見たことがなかったからである。

その後、しばらくの間話をしてから私たちは帰ることにした。私たちはとてもすがすがしい気持ちで別れたのだった。その帰り道で、何気なく腕時計に目をやると、私は驚きのあまり立ち止まってしまっ

た。何と私たちは、あの屋台で約一時間半も話していたのだ。興味深い話をしているうちに、あっという間に時間が過ぎていたのである。

この出来事は、私の中にある「日本でしか起こりえない話」という引き出しに収めることができる。そして私はこのような経験ができたことによって、当然ながら私の日本における生活はとてもすばらしい、意味深いものであると確信できたのである。

報告・学生生活と課外活動

学生生活の現況

学生部学生課　富塚　信治

はじめに

学生部学生課に所属してから、早いもので八年が経過しようとしています。その間、学生気質、生活態度は大きく変化しました。もちろん、麗陵祭のように、多くの学生が企画し、作り上げていく素晴らしいものがあることも知りました。他の大学にはないあたたかい雰囲気の、とても麗澤大学らしい一面であると思います。しかし残念ながらその一方、年を追う毎に、様々な学生の問題が増加し、時には深刻な問題も発生するようになりました。「学生がモラル・マナーをきちんと守ってくれるならば、自分の業務がもっと違う事に生かされるのになあ」とか、「どう指導したら、守ってくれるだろう」などと、自問自答しながら、日々の仕事に追われています。

具体的に、どのような問題に直面しているのかをここでまとめ、今後、自分自身がどのような心構えでその問題に対応していったらよいかを考えてみたいと思います。

喫煙の問題

一号棟から二号棟を歩くと必ずと言っていい程、煙草を吸っている学生を見かけます。ベンチに座って煙草を吸っている者、花壇の縁に座って吸っている者、最近では女子学生の喫煙者も多く、中には、地べたに

あぐらをかいて、吸っている者も見かけます。

九八年度、学友会アンケート調査で、喫煙者のマナーが悪いと感じる学生が回収数の約六〇パーセントいる事を受け、また教員アンケートでの結果等で検討し、その結果校舎内を分煙する方向で九九年度の二学期から実施しました。大多数の学生は守ってくれますが、一部の学生によるトイレ内での喫煙があり、便器ごみ箱に吸殻が捨てられ、掃除する際に困っているという報告がありました。

コンピュータの問題

麗澤大学のコンピュータシステムは他の文系大学と比べ、格段に進んでいます。学生一人一人がコンピュータアドレスを所持し、だれもが、自由に大学のサーバーを使用でき、また、メールも自由にできます。これは、学生諸君の信義に基づくことにより、自由に行えた訳ですが、今年に入ってコンピュータを悪用する事件が起こりました。それは、学生個人が所有しているアカウントとパスワードを外部の人間に教え、外部から不正アクセスにより大学サーバー上に多量の情報がおかれました。それにより、外部から一万件を越えるアクセスがあり、大学コンピュータの混乱を招いたものです。

その他の問題

煙草・コンピュータの問題以外にも校内、校外で様々な問題がもちあがっています。校内においては、授業中における私語や携帯電話の問題、ゴミのポイ捨て等、日常茶飯事であります。校外では万引き・窃盗・キセル・駐車違反等の交通違反、その他この紙面では書けないような行為も報告されるようになってしまいました。

おわりに

このように、学生が起こす問題と日々向い合いながら、様々なことを感じ、また考えさせられます。今、自分が学生部職員としてできることは、その思いを学生に伝えることだと思います。まずは学生として、いや人間として責任のとれる行動をとってほしいという事です。自分がある行為をするとき、このことをする

と周りの人にどのような影響をあたえるのか、まず考えて行動できる人間になってほしいものです。人は決して一人で生きているのではありません。多くの「つながり」の中で生かされているのです。そんな、当たり前のことを忘れている人こそ、「自分さえよければ」、「みんなもやっているからいいだろう」精神で、いろいろな問題を引起こしているのではないでしょうか。問題を起こした学生と接する時、その部分をしっかりと指摘することにより、その学生が何かを感じとって生活態度を改めてくれることができるのではないでしょうか。

そうは言っても、昔の全寮制（小人数制）のころと同じように、一人一人に細やかな対応をするのは、まず不可能でしょう。また、学生数が増えたことで、学生と教職員とのつながりが薄くならざるを得ません。それぞれの思いが、お互いに届かなくなってきています。ですから、まずは、学生一人から。目の前の学生一人を大切にすることから、徐々に広がり、「麗澤大学に来ると何かほっとする」と感じるような、人間的にあたたかい雰囲気の大学に成長するよう努めていきたいと思います。

学生生活と課外活動の現況

前学生部学生課　松田　寛

現在、学友会所属部活動は、運動部一三団体、文化部五団体の計一八団体で構成されており、各団体とも日々向上心を持ち活動しております。その結果、年々少しずつではありますが結果を出し始めている部活動も増えてきております。

平成一一年度の主な結果を挙げてみますと、サッカー部が「千葉県大学サッカーリーグ二部優勝一部昇格」。男子バレーボール部が「関東大学秋季リーグ戦一〇部優勝九部昇格」。野球部が「千葉県大学野球秋季リーグ戦三部優勝」。スケートの川崎由紀子（国際経済学科四年）さんが「第二五回東日本フィギュアスケート選手権大会女子シングル」において優勝し、福岡市で

行われる「第六八回全日本フィギュアスケート選手権大会」の出場が決定。空手道部が「第四二回全国空手道選手権大会」において男子団体型の部で全国四位。女子一般団体型の部で全国六位。太極拳同好会が「第七回埼玉県武術太極拳選手権大会孫式太極拳優勝」「全日本武術太極拳選手権大会出場権獲得」等など各団体の活躍が目立つようになってきました。

その他でも、軽音楽部では毎年「七夕ライブ」や「クリスマスコンサート」等を行い茶道部でもお茶会を開催するなど他大学との交流を目的に積極的な活動をしています。また、剣道部やテニス部、空手道同好会を初め各同好会等も積極的に活動しており優秀な成績をおさめております。右記の通り、麗澤大学の課外活動は、年々活性化されてきておりますがその陰には顧問・顧問代理・コーチの方々のご指導はもちろんですが学生達のたゆまない努力を忘れてはいけないと思います。

他大学等はスポーツ推薦入試により運動能力に優れた学生を集め、大人数の中でお互いに競い合っております。それに比べて本学の場合は特に一芸入試等はなく、極端な言い方ですが初心者に近い学生が集まり試合等に出場し戦う訳です。授業の終了時間も十八時ですので、時間的な制約もあります。このようにリスクを背負いながらも頑張っている学生達に敬意を表すると共に今後もこれに満足せず、更なる飛躍を目指して日々の練習に努力して欲しいと念願しております。

さて私が思うに大学という所は社会に出る一歩手前の教育機関であります。社会人としての自覚と自信を育む、そんな準備期間でもあると思います。その自信と自覚はどこから生まれてくるのか。これは人の顔が一人一人違うのと同じで多種多様であると思っております。ある学生は専門である学問を通して培われ、ある学生は留学による経験から、またある学生は学友会活動を通して、またある学生は課外活動における集団生活を通して培われるものだと思うのです。それぞれ自分にあった環境で自ら学んだ自信や自覚が社会人として一番大切な事でもあると考えております。余談になりますが、以前、某学生が本学に入学した際、やり

たい事が見つからず野球部に入部してまいりました。彼は特に野球を経験してきた訳ではなく、いわば初心者でありました。一・二年生時では課外活動から得るものの重要性や努力する事の意義、絶対にレギュラーになって試合に出るという強い気持ち等、彼自身、初めて経験する事ばかりだったと思います。結果三年生の時にレギュラーになれました。しかし彼の素晴らしい所はそれだけではなく四年生になってからです。最上級生になってからの彼は今度は自分自身の事よりも、チームの事を考え始めます。力のある学生とない学生とのギャップを埋めようと努力しはじめた訳です。そのお陰でチームもまとまり麗澤大学野球部創部初の三部優勝、二部昇格を達成できたのです。

本人も個人タイトルとして首位打者を取る事ができました。自らが努力して勝ち取った「自信」。彼は現在、某旅行会社に勤務し勝ち取った「自信」を武器にシアトルで頑張っております。今後、彼の生活の中で大学の課外活動から得た自信が必ず大きな支えとなってくれると確信しております。このように課外活動から得られる事は技術的な事だけではなく「仕事をする姿勢」や「気持ち」だと思っております。また、これが社会にでた際に一番大切な事であり、これが不足していては専門的な能力をつけても社会には貢献できる訳がありません。以前でしたらこのような基本的な物の考え方は大学に入学する前に自然と身についていたことですが、最近はそうでもありません。

先日、某大学の職員の方からこんな言葉を聞きました。これは受験生からの問い合わせです。以前は「お宅の大学に入学できたら何が学べますか？」要するに大学とは「自らで勉強したい科目を選び、自らで学ぶ」という基本的な姿勢があった訳です。その為、大学ではいかに学生が自ら学べる環境を整えるかがポイントになっていました。ですが、現在は「お宅の大学に入学できたらどうやって育ててくれますか？」に変ってきていると言うのです。これについて何が言えるかというと現在は「教育はすべて大学でしてもらえる」と考えている学生が増えてきているという事です。あるいは大学さえ卒業出来ればそれだけの知識を大学側

が自然とつけてくれるものだとも考えているのかもしれません。大学とは義務教育とは違い「自らが学ぶ所」であると説明しても納得してもらえない現実があるとも話していました。当然、この事は一概には言えませんしすべての受験生に当てはまる訳ではありませんが、このような受験生が増えてきている事実は現実にあるのです。要するに今の大学に求められているものは「学問の場」よりも「教育する場」になってきているように感じます。そのニーズに応える為には大学側から変っていかなくては行けないとも考えております。具体的に申しますとまず大学の教・職員が教育者になる事が大前提であると思います。教員は研究者である前に教育者、職員も事務屋ではなく教育者（教育職員）でなくてはならないと考えます。有り難い事に本学の場合は他大学と比べて教職員とも学生との距離が非常に近く教育的配慮の高い大学ではあると思います。しかし、これから大学全入時代を迎えるにあたり、上記のように多種多様な学生が増えてくる現状を考えると今まで以上にそのことを意識し、それに伴い学生のニーズに応えられるさまざまな活躍の場を提供し、「自らで学ぶ」という姿勢も教育して行く必要があると考えています。大学としての特色は一色ではなく多色にし、それぞれの環境での教育を重視し、片寄りのない教育環境をつくっていくべきだと考えます。以上の事から現在、在籍している学生はもちろん今後入学してくる多種多様であらゆる分野で活躍できる可能性を持った学生たちのニーズに応えられる大学。そんな大きな器をもった大学。学業成績だけではなく受験生のあらゆる能力を評価し、その可能性を伸ばしていけるような大きな器を持った大学。これが今後望まれてくる大学ではないかと考えております。その為にもまずは「学問」と「課外活動」という二本柱において学生の教育を主に、立派な社会人を育成するという事を目的とし、入学後の大学での活動に着眼していく事が必要だと思います。一般的にどの大学でも課外活動は広報的な位置づけとして捉えられる事が多かれ少なかれあると思います。大学での課外活動に、それを求める事が必要不可欠であるならば、むしろ、教育の一環として課外

活動を捉え、課外活動の重要性に着目し、課外活動を通しての教育を今まで以上に推進して行く事も立派な学生を社会に送り出す一つの要因であり、結果、今のニーズに応えられる魅力ある大学として自然と大学広報にもつながってくると私は考えております。現在、本学の部活動は他大学と比べると一歩も二歩も遅れをとっております。しかし、多くの障害がありながらも学生たちは意欲を持ち頑張り結果を出し始めています。その学生たちの情熱の火が消える事のないよう「課外活動を通しての教育」において学生たちをバックアップし、立派な社会人として送り出していきたい。その第一歩として自らが「事務屋」から「教育職員」へ踏み出そうと考えております。

人と人の関わりの中で

前学生部学生課　今村　直美

私はクリスマスの季節が大好きです。クリスマスを十日後にひかえた今のような季節が好きなのです。街にはきれいに飾られたクリスマスツリーやイルミネーションの数々。緑と赤のクリスマスカラーの大きな袋をぶら下げて歩く人々。プレゼントを選ぶ人の顔はみな穏やかで優しさにあふれているような気がします。プレゼントを渡す相手のことを想い、それを渡す瞬間のことでも想像しているかのように、みんな楽しそうです。見知らぬ人のはずなのに、時に愛しさを感じます。

今年の学生部のスローガンは「MASHでCOMMUNITY!」でした。MASHとは、Good Manners（良いマナー）のM、Active Participation（積極的で）のA、General Safety（安全で）のS、Healthy Lifestyle（健康な生活）のHを言いやすくまとめたものです。これは平成十年度の学生部長であった丸山先生の、麗澤大学の学生に贈るメッセージでした。そして、今年は、新たに岩佐学生部長を迎え、スローガンもパワーアップしました。そこで生まれたのが、このスローガンです。岩佐学生部長のお言葉を借りれば、

「毎朝満員電車の中で肩が触れ合っていたとしても、ただの見知らぬ人ならば、そこにコミュニティは存在しない。しかし、たとえ何千マイル離れていようとも、心と心の交流があれば、そこにはコミュニティは存在する」というのです。麗澤大学を心と心のふれあう場所としていきたい。お互いの〝MASH〟を尊重するためにも、自分が麗澤大学というコミュニティの一員なんだという意識を持ってもらいたいという願いが込められています。

今の学生は基礎となるモラルに欠けているためにマナーが悪い。協調性もなければ自主性もない。特に大学に愛着を感じている学生のようにも見えないし、まぁ程度よく浅く付き合っていけばいいのだ、何事もなく四年間で無事に卒業さえしてくれたらそれで良いのだ、などと普段の学生課の業務を行なう中で不謹慎ながら感じることもあります。ここ二・三年増える傾向にある事件や事故に疲れる事もあります。しかし、はたしてそれは彼らの本当の姿なのでしょうか？　本当に大学に何も感じず、ただただ、授業を受けるだけに大学に足を運んでいるのでしょうか？　答えは明らかに「NO」です。それは今年の学友会の活動や麗陵祭のテーマを見るだけでも分かります。

今年の学友会のテーマは「絆―誇りある大学に―」です。学友会会員（学生）が「麗澤」という一つの絆で結ばれることを望んでいます。さらに、彼らは、互いの絆を深めるためには、三つのコミュニケーションを大切にしていくことが必要だといっています。①学生（会員）と学友会執行部とのコミュニケーション、②学生同士のコミュニケーション、③学生と教職員のコミュニケーションの三つです。そして、それらを達成させるために、学友会本部を中心に、麗澤の伝統とも言える寮とのネットワークを作ろうと試みました。毎年三月に行われる寮長セミナーに学友会役員が参加し、学友会活動に理解を求めました。また、毎月定例で行われる寮長会にも参加してきました。まだ、情報の交換のみという形ではありますが、何かが始まったとは言えるでしょう。また、出版委員会が、学生に対して「大学職員に対する学生の意識調査」も行いまし

た。この目的は大学という空間を共有しながらもなかなかコミュニケーションを図ることが出来ない学生と職員をつなぐ架け橋となり、更に麗澤大学を良くしていくためにと行われたものです。このアンケートの結果は毎月発行されるS.U.Press新聞（学友会発行）に掲載され、それは大学職員の研修会でも取り上げられることになりました。さらに、部長会を中心に各部活動のメンバーに声をかけ、学内のゴミ拾いが行われたことも、彼らの絆を意識した行動であると思います。

学友会活動の中で最も大きい行事である麗陵祭（大学祭）のテーマは、「和―あなたにとってのなごみの場所へ―」です。ここには二つの意味が込められています。一つ目は、この麗澤大学が、学生一人一人にとってなごみの場所となるように。そして、もう一つは、この混沌とした社会に麗澤大学がなごみの場所となることです。今年は環境に配慮し、大学祭の屋台等で使用するプラスチック製の容器をリサイクルに回せるようにごみの回収を工夫したり（回収率ほぼ一〇〇％）、近隣の方々のご協力を得てペットボトルを回収し、それをオブジェにし環境について問題を投げかけたりしました。また、全盲の方のご協力によりブラインドウォークの体験ができるなど、あらゆる角度からあらゆる人にとっての「なごみ」の場所を模索しました。お祭り的要素の強い大学祭が多い中、これだけのメッセージを持たせた大学祭を行なえる麗澤大学の学生はやはり素晴らしい魅力の持ち主なのです。

確かに楽観視できないような問題も学内で起こっています。心無い行為も数え切れないほど起こります。しかし、大学の職員として学生を育てるにはマイナス要因に捕われるよりも、学生と一緒にとにかく前を向いて進んでいくことが大切だと思います。クリスマスの季節に、見知らぬ人を見て愛しいと思う、そんな気持ちを大切にしながら、学生課での職務に当たりたいと心から思います。そして、その想いにより、一人でも多くの学生に他人を思いやることの大切さや素晴らしさを感じてもらえたなら、嬉しい限りです。

テニスを深く楽しむには

麗澤大学硬式庭球部コーチ
モラロジー専攻塾教務室長　宗　中　正

はじめに

私は、昭和五十四年に麗澤大学のイギリス語学科に入学し、四年間硬式庭球部に籍を置きました。卒業後、地元の柏テニスクラブでコーチをしながら国内各地のトーナメントに挑戦して三年余りを過ごした後、モラロジー研究所の職員として再びこのキャンパスに身を置くことになりました。以来コーチとしてテニス部に関わってきました。

現在の男女テニス部には、下田健人先生と堀内一史先生の二名が顧問として、また現在日本テニス協会のナショナルコーチとして活動している塩釜泰弘さんと私の二名がコーチとして関わっています。今回は、一、テニス、二、運営、三、大学教育における部活動という三つの視点から、私が最近心がけていることや考えていることをまとめてみました。

一、テニスについて

(1)　一人前のプレーヤーとして扱うこと

現在、テニス部のメンバーは、男子部と女子部を合わせて三十名ほどです。経験や実績は様々ですが、

レベルにかかわらず、ひとりひとりを一人前のプレーヤーとして扱うようにしています。「そうやって学生を大人扱いするのは却って学生のためにならない」という声もありますが、逆に今こそ、学生を大人として扱うことが必要だと思います。ひとりひとりが一人前のプレーヤーとしてテニスに取り組むことを前提として、不十分なことは補い、分からないことは一つずつ教えるように心がけています。

一人前であるということは、例えば、試合で起こるすべてのことを自分のこととして引き受けてベストを尽くすことです。また、自分のプレーの課題を自分なりに分析して具体的な練習プランを立て、自分のテニスを育てていくことです。あるいは日々の生活においても、テニスについての知識を深め、心身のコンディションを整えるよう心がけることです。このような意味で一人前のプレーヤーになることができれば、テニスを通して多くのことを学ぶことができると思います。

(2) 「部活動」からの脱却

テニス部の活動スタイルも、ここ数年ずいぶん変わってきました。例えば、練習に対する考え方です。練習時間が決まっているから出るのではなく、自分のテニスを高めるために必要な練習を行うという考え方に変わってきています。また、全員での練習時間を減らす一方で対抗戦の数を増やし、練習・練習・練習・試合、というパターンから、試合・練習・試合・練習というパターンに変化してきています。全員での練習時間を減らした分だけコートが空きますから、自主的に練習をしたいメンバーがそれぞれの課題に取り組むことができます。対抗戦についても、塩釜コーチの助言を受けて、積極的に遠い対戦校まで出かけていき、不慣れな状況で経験を積むように心がけているようです。このような改革を自分たちでできるようになってきたことからも、メンバーの中に一人前のテニスプレーヤーとしての自覚が徐々に育ってきていることを感じます。

(3) 出来るだけ早く試合を始める。

初心者ができるだけ早く試合を始めることも、プレーヤーとしての意識を高めるために必要なことです。テニスは一般に考えられているほど難しいスポーツではありません。ゲームを楽しむまでにさほど時間はかからないものです。難しいと感じる人は、いきなり（テレビで見るような）高度なレベルを目指していることが多いと思います。毎年初心者が入部しますが、できるだけ早く試合を始めるよう指導しています。練習があって試合があるのではなく、試合があって練習があるという考え方を基礎として、レベルに合った練習を組み立てることが大切だと思います。

(4) 精神面より具体的技術の指導を重視する

「テニスはメンタルなスポーツだなあ。自分は大事なところでいつもミスをする」と思っている人は多いと思います。しかし実際には、その「大事なところ」で使うショットの習得が十分でない場合が多いものです。自分が「大事なところ」でミスをしたショットと同じ設定で十本打ってみて、何本ねらった通りの球が打てるかを試してみるとよく分かります。その時に五本しかうまくいかないようなら、まずそのショット自体を練習することです。一応狙った方には行くが、ばらつきがあるようなら、そのばらつきを小さくするように練習を重ねることです。このばらつきを小さくすることで、「大事なところ」でのミスはほとんどなくなるものです。

もし、十本のうち八本以上イメージ通りのショットが打てるのに、「大事なところ」では入らないようなら、次には、試合でミスをするときと上手く打てた時がどう違うのかを具体的に検討するべきです。特に、ボールに近づいてから打つまでの流れ、身体のひねりの使い方、打つときの力の入り方などに注意を払います。ミスが精神的な原因によって起こっていると思える時でも、その原因によって身体に何が起こっているのか、過度の緊張やリズムの変化などを、一連の動作の中でできるだけ具体的に捉えて

修正するように心がけます。

精神的に弱い、弱いと言われれば、「自分は弱いんだ」と思い込みやすいし、「オレは弱いから」ということで、かえって技術的な課題に目を向けなくなってしまうものです。だから、「オレ、精神的に弱いンスよね」という言葉は、「オレ、うまく打てないんですよ」と翻訳して聞くようにしています。このような翻訳を自分でできるようになることも、一人前のプレーヤーの条件だと思います。

(5) テニスの楽しみ

新入部員の中には、試合をすること自体が苦手な人もいます。負けるのが嫌だという場合もあれば、負かすのが嫌だということもあります。こういう気持は誰にもあるものですが、大体は、テニスの楽しさを味わうことで自然に解消します。テニスの楽しさには、上達する楽しさ、発散する楽しさ、ゲームの楽しさなどさまざまですが、何に由来するものであっても、楽しさの方が苦しさよりも比重が大きければあまり気にならないものです。試合の楽しさを味わうことができれば、勝ち負けへの執着はさほど大きな問題ではなくなるでしょう。

(6) 戦って仲よくなる

「試合が楽しい」と思えるようになるには、試合を通して相手と仲よくなることだと思います。よい喩えではないかもしれませんが、けんかにも後味の悪いけんかと、けんかしてかえって仲良くなるような明るいけんかがあります。もちろんテニスはけんかではありませんが、戦って仲よくなることができるなら、試合も楽しくなると思います。

後味の悪いけんかは、互いに一方的で相手の言うことを聞いていなかったり、無視や偏見、ひがみなどが幅を利かせているものですが、明るいけんかは、いくら言葉が激しくても、相手との間にコミュニケーションが成り立っています。お互いに相手からのメッセージをちゃんと受け取っています。トッププロでも、それぞれの選手がただ来たボールをひっぱたい

ているだけで、相手を認めず、無視しあっているような試合は面白くないものです。

逆に、観ていて面白く、共感を覚える試合には、選手の間に打てば響くようなやり取りがあるものです。そういう試合は、厳しい接戦であっても、選手も観客も楽しんでいます。選手同士のボールによる対話が、観客や、テレビを見る人にまで感動を与えます。このような試合が選手を育てているのだと思います。マルチナ・ヒンギス選手の試合が見ていて楽しいのは、彼女が相手とのやり取りを楽しみながら、より高いレベルに自分のテニスを導こうとしているからではないでしょうか。このことは、彼女の勝負強さにも関係があると思います。

(7) ボールによる対話

大切なことは、ボールを打ち合うことが相手との対話であることを知り、いろいろなやり取りができるようになることです。より具体的には、リズム、ペース、緩急、深さ、コース、球質などについて、さまざまなバリエーションを、状況に応じて使い分けられるようになることです。語彙が豊富になり、状況によって使い分けられるようになれば、相手の意図やメッセージを受け止め、適切に答えることができるようになります。

逆に相手をやっつけることしか頭にないと、相手とできるだけ話さないで一方的に試合を終わらせようとしがちです。そうするとかえって無理をしてミスをしたり、自分のミスを許せずイライラしたりします。また、自分勝手にプレーするので自分の癖に気がつかず、発展がありません。逆に相手に自分の癖を見抜かれてしまえば、簡単にやられてしまいます。一方的にファーストセットを取った方が、セカンドセットを競り負け、ファイナルセットを一ゲームも取れずに完敗することはよくあることです。

勝ちを目指して試合をするけれども、勝つことばかりに偏ってしまっては勝てないというわけです。相手にプレーをさせないで勝つよりも、相手にもプレーをさせた上で技を競い合い、対話を通じてお互

いに高めあう方が正統だと私は考えます。

以上頭に浮かぶままに書きましたが、まとめてみると次のようになります。①一人前のプレーヤーとして自分のテニスを育てること、②練習は技術的な課題を中心とすること、③試合を中心にして、試合のための練習を組み立てること、④勝つことだけを考えるのではなく、試合を相手とのコミュニケーションだと考えて、対話を楽しみながら自分のテニスを育て、高めること、これらのことは、テニスをより深く楽しむヒントになると思います。

二、運営について

(1) 信頼できる関係

コートでのプレーと同様、部の運営においても対話が必要です。部員同士が意思の疎通を図り、目標に向かってチームを機能させるためには、じっくりと時間をかけて、相互の信頼関係を築くことです。特に、価値観の多様化した現代の若者たちは、非常に乏しい共通の土台からスタートしなければならないのですから、この最初の段階をていねいに、時間をかけて進める必要があると思います。試合も運営も、どちらも対話を通じてより良いものを生み出そうとするものです。「ああ、試合も運営も同じだな」と思えるようになったら、テニスも上達し、運営も充実すると思います。

(2) 着眼大局、着手小局

部の運営には着眼大局、着手小局の考え方が必要です。第一には、部や大学のこと、近隣や社会のこと、あるいはテニス界全体のことをよく考え、把握した上で一つ一つの活動を行うことです。第二に、長期的視野に立って計画を立て、日々の活動を積み重ねることです。第三に、自分のテニスを育て、部の運営に取り組む中で、物事の優先順位、本末、軽重についての見識を身につけることです。このような視点に立って、「自分にとって大切なものは何か」、「今自分がしておかなければならないことは何か」というそれぞれの人生における大局と小局を学んで

ほしいと思います。

三、大学教育における部活動のあり方

最後に、大学におけるこれからの部活動のあり方について私の考えを述べておきたいと思います。

(1) 安心と信頼

いつの時代もそうですが、特に今の若者たちには、安心できる場と信頼できる人間関係が必要だと思います。部活動に限らず、ゼミやサークル、友人同士など、学内の小さなグループにおいて信頼と安心を得、また自分からも信頼と安心を生み出す力を身につけてほしいと思います。運営する側ができることは、そのための援助です。大学に関わる一人一人が中心となり、また媒介となって、一つ一つの場が育つように努力することが必要です。大学に関わる者は、役職は異なっても、場を作り、人を育てるという機能においては、共通の使命を担っていると思います。

同時に、施設に関しても、それぞれのグループの特性に応じ、運営の便に配慮して、安心して活動できる場をととのえていくことが必要だと思います。

(2) 小人数のグループが有機的なつながりをもつコミュニティ

多くのグループによる場作りがバラバラに行われるのではなく、有機的なつながりをもって活動することで、それぞれの活動が互いに活性化され、ひいては大学全体として力を発揮することになると思います。

部活動間の交流や、様々な部活動が協力して共通の課題に取り組む、ゼミとクラブ活動など、分野の違うグループが互いの活動を紹介し合うなど、独自の接点を見つけて交流し、協力することもできるのではないでしょうか。このような地道な活動の積み重ねが、学内を静かに活性化し、大学全体の調和と発展の原動力になると考えています。

(3) 一人一人を大切にすること

これまで述べてきたことすべての基本は、一人一人を大切にすることにあります。組織が大きくなればなるほど、一人一人を大切にするように心がけなければなりません。二千五百人の学生一人一人がどこかで誰かに温かく面倒を見てもらっている、安心できる場をもっている、日々信頼できる関係を築いている、将来に必要な知識を得ると同時に、自分の人生についての指針を定める機会を得ている。二十一世紀において必要とされるのは、そんなキャンパスではないでしょうか。

テニス部は、二千数百人のうちのわずか三十人、約一%の集団に過ぎませんが、縁あって集まったチームのメンバーと共に、一つ一つの活動を着実に積み重ねていきたいと思います。

フィギュアスケートを通して学んだこと

国際経済学部　国際経済学科卒業生（平成十二年三月）　川崎　由紀子

私は、六歳の頃から、現在に至るまでの約一六年間、フィギュアスケートを中心として毎日の生活を送っています。これまでの間に、本当に数多くの貴重な経験をしてきました。

正確に言えば、本格的にオリンピックを目指してスケートにうちこむようになったのは、小学校四年生の頃でしたが、私は小学校六年生の一学期まで、北海道（札幌）で家族と一緒に過ごしていました。スケートだけではなく、クラシックバレエや、器械体操、陸上競技に水泳等の種目も行い、その他にも、書道やピアノなどの文系関係も、習っていました。

当時は、本当に忙しく、皆が学校帰りに遊んでいる時間に、自分は何らかの習い事に出かけ、皆をうらやむこともしばしばありましたが、その多忙な生活に不満を感じた事はありませんでした。

すべての習い事が得意で好きだった、というわけではありませんが、基本的に身体を動かすことが大好きだったので、『努力』などということを、それほどにまでは意識せず、無我夢中になって自分の多忙な生活をこなしてきました。

そして小学校六年生の二学期から、千葉県松戸市（新松戸）のコーチの家に、単身で下宿させてもらい、スケート中心の生活になり、その翌年にデビューし、『全日本ジュニア選手権大会』で銀メダルを獲

得し、初の国際舞台を経験したのですが、ここに至るまでにも大変なことがありました。

まず、スケートに関しては北海道にいた頃とは違い、ライバルのたくさんいる良い環境の中でひたすら練習に練習を重ね、〝人の上に立つには、普通の人以上のことをしなければならない〟と毎日自分に言い聞かせ、『努力』してきました。その成果が出て、全日本ジュニア初出場にして、メダルにも手が届いたのだと思いますが、ここで問題になっていたのが学校の勉強です。

確かにスケートの練習が、北海道時代よりも厳しくなり、大変だったということはありましたが、私はそれに甘んじて、学業に関する『努力』を怠っていました。みるみる学校の成績が落ち、ついに母親に「どれだけスケートを頑張っても、学校の勉強をおろそかにしては駄目。もし次の成績が上がらなかったら、スケートなんかやめて北海道に帰ってきなさい！」と電話で言われ、私は不安と悔しさで大泣きしました。

これを機に、私は『文武両道』という目標を常に意識した生活になりました。スケートと勉強の両立というのは、実に難しいことではありましたが、『努力』次第で少しずつスケートも上達し、勉強の成績も上がりました。

このように、年齢を増すごとに私の『努力』という言葉に対する重みと大切さも増してきました。それと同時に、『努力』という言葉が好きにもなりました。なぜなら『努力』している自分自身が好きだったからです。

高校に入ってからもスケートと勉強の両立をし、学校の成績はクラスでトップ、または上位に入り、勉強も好きになりました。しかし、今度はスケートの方がスランプ状態に陥ってしまったのです。

中学三年生から高校二年生になるまでの間、ロシア人の男性と組んでペアースケーティングの種目にも取り組み、大きな国際大会に出場し、ロシアで長期練習に励むなど、この時もさまざまな経験をしました。『アジアカップ』での優勝や、『ＮＨＫ杯』三

位入賞、『世界選手権』出場など、人が最終目標とする舞台にも立ちました。しかし、パートナーの都合で、カップルを解消しなくてはならなくなり、私はシングルスケーティングで、再び目標を立て直さなければなりませんでした。しかし、心のショックは大きくなかなか目標も定められずに、どんどん精神的にも肉体的にも落ちていきました。この時、初めて〝スケートをやめようか…〟という考えが頭をよぎりました。それでも、なんとか自分を立て直し、努力しました。

そして、いよいよ麗澤大学に通い、大学生活が始まりました。実は、この入学してからの一年間が波瀾万丈な時期でした。

自分で頑張っているつもりでも、なかなか進歩せず、イライラしては現実から逃げるかのように遊んでしまったり…。しまいには、スケートが嫌いになり、なぜ自分がスケートをやっているのか、という意義もわからなくなってしまいました。〝スケート〟というものを見直すためにも、長年滑ってきたホームリンクを離れて、アメリカへ練習しに行ったり、色々と試みてみましたが、何かパッとせず、全日本選手権の場に立っても意気消沈したスケートを披露してしまいました。もっと頑張らなくてはならないと漠然とはわかっていても、〝何のために？〟という疑問にたどり着きました。そう、まさにそうなのです。当時、私は完全に目標というものを失ってしまっていたのです。目標を定めるということは、何事に取り組むにしても、最も重要なことであると今でも痛感します。

ごく最近のことでありますが、十月の関東選手権で優勝したとはいえ、反省点の残る試合だったので、十一月の東日本選手権大会までに、いくつかの目標を立てて練習に励みました。関東選手権大会の直後の一週間は、本当に見違えるほどの意欲をもって氷の上におり、まるで別人のようだとコーチにも言われ、この調子で東日本選手権大会までの約一ヶ月間、頑張ろうと心に誓ったのですが、その二週間後頃、急に練習意欲を失った状態になってしまいました。

調子が悪い、などといった現実的問題があったわけではないのに、自分の気持ちが盛り下がってしまったので、わけがわからずにいて、次第にその気持ちが氷上での態度にも現れてしまい、コーチにも〝何があったんだ〟と指摘され、自分の頭の中にも『?』が浮かび上がってしまいました。この疑問に対する答えが、まさに目標意識が薄くなってしまっていたということだったのです。私は、中学一年生にデビューし、今年は一〇シーズン目ですが、ジュニア時代から東日本選手権で優勝したことはなかったので、『今年は関東選手権で優勝できたから、次の東日本選手権でも優勝しよう』と、私にしては珍しく順位に関する目標を立てました。この目標を立てるに当たっても、様々な過程がありました。たいてい大会前に目標とすることは、『自分の力を全て出し切る』、『最後まであきらめずに自分のスケートをする』、『練習通りに集中して臨む』などといったことなのですが、順位というものは、自分がやることをやって初めて結果として出てくるものなのだから、自分がやることを考える前に結果ばかり気にかけても、絶対に良い結果は出ないし、自分の力も思う存分発揮できません。ゆえに、順位に関してはそれほどにまでは、執着しないのです。事実、自分の中であまり良い演技ができなかったと思うような時に、順位だけ良くても達成感は生まれてこないし、反対に自分の力を全て出し切り納得のできる演技ができた時には、順位が不本意であっても、〝自分の力不足だな、もっと努力しよう〟とプラス思考的に考えられます。

これは単なる自己満足なのでは…と思われるかも知れませんが、実はこの自己満足ということが、非常に必要不可欠なことであると近年感じています。確かに、他人に認められるためには、結果という形で残さなければならないのは、世の中全てにおいて共通していますが、まず〝自分〟というものをしっかり持って、何事にも取り組まなければ、自分を見失った時、立ち直る時に大変な苦労をすることになります。この〝自分〟というものを維持することは、

実はとても難しいことです。自分のレベルを上げるも下げるも、全て自分自身の責任だからです。〝自分〟を維持するに当たって、何よりも重要なのが精神面です。私は、この『精神的コントロール』が上手くない、とつくづく思うことが多々あります。何事も、熱し易く、冷め易い傾向にあり、あるトレーニングに燃えてものすごい努力をしても、なかなか持続できないことが度々あります。この時、私の頭に『継続は力なり』という耳の痛い言葉が浮かび、悩みます。そのような時、原点に戻って考え直してみると、やはり目標意識がぼやけてきてしまっているのです。このようにして、何度となく〝目標設定の重要さ〟を思い知らされています。

最後に〝自信〟について述べたいと思います。よくコーチに大会の時、「自信を持って滑りなさい！」と言われます。この〝自信〟という言葉には、二つの取り方があると思っています。どういうことかというと、大会のために来る日も来る日も練習を積みますが、その一日一日の練習に対する意気込み、そして一日毎の結果の積み重ねが、しっかりできている時は〝本物の自信〟として持てますが、怠けてしまっていたり、積み重ねができていない時に、自信を持とうとすることは、ただの〝うぬぼれ〟になってしまうということです。こうして、言葉で書いてしまえば簡単な〝自信〟ですが、〝本物の自信〟を持てるようにするには、気の遠くなるような努力をしなければならないと痛感する毎日です。

今まで述べてきたことを、自分自身で再度、頭の中で確認し、スケートだけでなく、全てにおいて精一杯努力しようと思います。

〈第72回（平成十二年一月）日本学生氷上競技選手権大会　優勝〉

山と私　～山の会を通じて～

外国語学部　中国語学科卒業生（平成十二年三月）
山の会所属　石川暁崇

大自然に囲まれてみたかった。パーティーを組んで冒険をしたかった。そんな憧れだけの気持ちが私を山の会に、山の世界に誘った。

谷川岳。これが私の運命を変えた、初めての登山。「山の天気は変わりやすい」とはよく言ったもので、その名の通り、霧雨、曇り、ガス(霧)、夕焼け、翌日は朝焼けから始まって、ガス、晴れ、大雨、雨。これが山の実態なのだとつくづく実感した。霧雨の中の急登や雪渓、山での食事、雲海の中の夕焼け、満天の星空と流れ星、山頂での朝焼け、青空の下でのトイレ、川の水の恵み、大雨、ヒルに血を吸われる……、そのすべてが初めて尽くしであったにもかかわらず、私は異文化(!?)に迷い込んだその日に、何故だかここが自分の居たかった場所のように思えてならなかった。そして、この谷川岳が、私の中でまた山へ行こうという想いを強くする。山と私の関係は 全てがここから始まる。(以下は初山行の感想を引用)

自分は山に登るのだ、という実感が頂点に達したのが深夜の土合駅、電車から降りた直後の寒さ。そして駅の改札口付近では、シュラフ(寝袋)で眠りに入っている人を目撃。これが山行の第一歩なのだと思い、そ

の日はシュラフにくるまる人達にまぎれ、ぐっすりと寝ました。（中略）

考えていたよりもハードなコースで、初めのうちはほとんど足元しか見ていなかった。しかし、登るにつれ木々が少なくなり、いつのまにか麓を見下ろしている自分に気づき、そこはもちろん一面が大自然。何故だか笑いが込み上げてくる。……フッフッフ、ここが自分のいたかった場所さ!!　その後は、歩行中は辛すぎるけど面白く、ほとんど勢いだけで歩いていたんだろうな。肩の小屋が見えた瞬間、ヒトと自然は一体化していると思い、幸せに浸りました。そして昼食後、頂上まで一歩き。うおぉーっ!!　昨日まで雲の下にいた自分は、なんてもったいない人生を送っていたのだろう。でも、今まで生きてきてよかった、と満足感三〇〇%です。（中略）

この山行では、肉体的に、また精神的にダメージを受けた面もあったけれど、山に来なければ味わえないことを体験した、という想いが何よりも強いです。

（後略）

九六・七

それから気がつけば時は流れること三年半。一体幾つのピークを踏破したことか。「連れて行ってもらう」型の参加から、「連れて行く」型の参加へと変わり、四年目の今年に至っては、一週間の単独個人山行を果たした。その中で、入山の意識も変わった。ただ山へ行けば良いのではなく、そのためには何を成すべきなのかを考えるようになった。山には山の社会があり、その社会の暗黙の掟に従いながら、人々が生活していることに気付いた。私はこれからもその中に溶け込んで、日々を過ごすことがあるのだろう。個人的な楽しみとしては、山に抱かれ自分を感じながら、リコーダーの音を風に乗せることかな。

さて、「山の会」とは一体どんなところか、ここで少し紹介したい。部室に来ていただくと一目瞭然なのだが、強いて一言で表わすならば、「所帯染みている」…そこは、登山用品から始まり、ありとあらゆる生活グッズが揃う快適な空間（但し、散らかし放題!?　要掃除!!）。そのためか、部員たちは授業

の空き時間の合間を縫っては部室に顔を出し、山の話や他愛もない話に花を咲かせており、その中でお茶でも入れながらまったりする、というこれぞほのぼのとしたファミリーなのである。しかし、部員各自の個性は強く、各々のやりたいことは明確で、時には衝突……　それでも山の中で、朝から晩まで一緒にいたせいだろうか――山はある種生活を持ち込んだ面が強く、メンバーの意外な一面も見えてくる。きっと私も知らず知らずのうちに、自分の長所や短所を見せているのだろう。そして一日の終わり、暗闇に静まるテントの中、思い思いのことを語り合うことで、お互いのより深い理解を得ていたのだろう――　やはり一致団結する時の山の会は、他のどこにも負けないほどの連帯感を感じさせる。これぞOBの残した名ゼリフ「We Are the Best Team, RBV」なのである。（RBVはドイツ語Reitaku Berg Verein の頭文字を取ったもので、いわゆる「麗澤大学山の会」の別称です。）

では、私達山の会にとっての「山行」とは何だろうか。近年、アウトドアブームと囁かれ始めてはきたが、私達山の会では、山行を「アウトドア」という一言で片付けることは出来ない。気軽に自然の中に溶け込むことも楽しいものだが、それ以上に忘れてならないのが「安全意識」である。常に危険を予知することはどれだけ気を配っても配り足らないほど。入山前から、綿密な行動計画を立てる。山の会では、安全係と呼ばれるパーティーの先頭を歩く者が、メンバーのレベルに合わせたより安全なコースを計画し、入山中は安全係が行程の進路やメンバーの体力などからの歩行ペースを配慮したり、パーティーの行動時間の管理を行う。装備は装備係が必要最低限プラス予備の装備を考え、軽装備を目指す。食事は食料係が栄養面や水場の状況などを踏まえながら手軽に作れる献立を立てる。天候は入山前に気象係があらかじめ天気予報をチェックし、入山中はラジオを聞きながら天気図を書き、明日の予想を立てる。怪我を負う可能性も考え、保健係は救急道具を携帯し、緊急の救護手当てを率先する。次回の山行のた

めに入山中の行動時間や状況をすべて記録するのが記録係で、これも欠かすことが出来ない。そしてその全てを統括し、あるいはサポートし、状況に見合う最終判断を下すのがリーダー。

細部まで見落とさないようにしながら、何も事故が起きなくして初めてその山行の価値が見出されるのではないだろうか。そのためには普段から、ただ登山計画だけを立てるのではなく、山の知識の積み重ねやトレーニングを怠ってはならない。（ちなみに、登山者特有のトレーニングである、20〜30kgのリュックサックを背負いながら階段を昇り降りする通称「ボッカ」。山の会では大学二号棟の階段を利用し定期的に行っているが、この姿が一般の学生の目にはとても奇抜なものに映るらしい……　皆様、どうぞ暖かい目で見守っていて下さい。）各自が山に入ることで、自分なりの山の哲学を繰り広げるのは自由だが、「安全意識」と「危険予知」だけは普段から念頭に置くこと、これだけは後輩に理解してもらいたい、とこの場を借りて強く願う。

また、入山後には「山行記録」と呼ばれるものを毎回発行している。私はこれがけっこう好きだ。各係毎の反省、個人の反省や感想を思うがままに綴り、次回の山行に役立てるのだが、特に個人の感想は、メンバーそれぞれが山行記録の原稿締切りに文句を言いながらも、山で感じた何かを自由に語っている。それを読むのがたまらなく嬉しい。一行のメモが全てを甦らせるからだ。そして時が経ち、他人の感想や自分自身の感想を、再び読みかえすと、自然に顔がほころんでくる。そこには情けないことや下手な文章を書き記した自分もいるけれど、嬉しくなるのは、そこに自分がいた証だ、と思えるからかもしれない。

最後に、私が山の会において、否、大学生活の中で最も衝撃を受けたこと、それは昨年夏、山の会創部以来初めての山の事故である。北アルプス縦走の最終日、下山した私達を待っていたのは、昨夜来の雨から突如発生した土石流だった。先に吊り橋を渡

り終え、それを傍らで見ていた私は、今でもあの光景がはっきり目に浮かぶ。今正にその橋を渡りかけた大切な友が、土石流に呑み込まれていく……　私達はとてつもなく大きなものを失った。

多くの方の協力を得た捜索も空しい結末を迎え、彼女は今も、北アルプスの麓、高瀬ダムの底に眠っている。その後、その現実を受け入れるためだろうか、私達は大学にて彼女の歩みを振り返りながら彼女を偲ぶお別れの会を挙行、また彼女への想いをメッセージとして彼女に捧げた文集の制作を進めた。その過程で私は幾度となく、その活動を行うこと自体に疑問を感じていた。そして、あの事故は本当に目の前で起きた出来事なのだろうか、と自問自答を繰り返したが、やはり彼女が再び私の前に現れることはなかった。しかし、彼女は私に新たな喜びを与えてくれた。それは彼女の捜索に協力していただいた方々、お別れの会、文集作りを手伝って下さった方々、そして彼女のご家族との出会いである。彼女をよく知る人も、そうでない人も、みな親身になって私を支えてくれた。大学教職員の方々、ＯＢの諸先輩方、私の傍にいてくれる友人には感謝の気持ちで溢れている。そして、山の会もまた、多くの方々に支えられ、見守られながら、新たなる歩みを始めた。私達の心には、彼女の存在が一際深く刻まれているのである。

あの事故から一年後、再び同じ場所に立つ。そこは澄み切った青空。深い深い青緑色の水面。穏やかだった。山も、私も。

そこに山があるから、今のみんなに出会え、今の自分がいるのだろう。

第三十六回麗澤大学麗陵祭レポート

麗陵祭実行委員会

期　日　平成十一年十月三十日（土）、三十一日（日）、十一月一日（月）

テーマ　和〜なごみ〜

あなたにとっての「なごみの場所」へ

テーマの意味と、方向性……このテーマには、麗澤大学の小規模な特性を活かし、常に温かで、和んだ雰囲気をもう一度見つめなおしてほしいという願い、そして、現在私達が生きている社会の中にも、「なごみの場所」をつくっていきたいという願いを込めました。現在の社会には、誰にとっても過ごしやすい場所が非常に少ないような気がします。そこで、この麗澤大学麗陵祭を通じて、多くの人が、他人を思いやる気持ちを持ち、社会の諸問題に関心を持ち、誰にとっても過ごしやすい「なごみの場所」を作っていってほしいと考えました。

来場者数　約七八〇〇名

総参加団体　計一〇九団体

出店団体　計五二団体

展示団体　計三二団体

イベント団体　計二五団体

チケット制コンサート　TOKYO NO.1 SOUL SET（ライブを開催）

観客数…約七〇〇名

主な社会的イベント

ブラインドウォーク・車椅子体験イベント

この体験を通じて、身障者への理解を深めると共に、

思いやりの気持ちを持ってもらう

RV-net講演会　RV-net（麗澤ボランティアネットワーク）主催、元青年海外協力隊員による講演会

主な社会的展示

骨髄バンク　骨髄バンクへの知識と理解を促す展示

にくっぷり　自然と人間の共存。我々の目指す社会とは？を考えさせられる展示

ピルに関する展示　近頃解禁されたピルの正しい知識を知ってもらうための展示

RV-net　様々なボランティア活動の情報提供

なんみんを考える会　世界の難民について考える展示、募金活動の実施

国際的料理　タイ・韓国・台湾・モンゴル族・ウイグル族・中国・ラオス・ドイツなど、世界各地の料理

麗陵祭各賞受賞団体

屋外飲食優秀賞

・ザーキーズ　・日・タイ研究

・シルクロード店

屋内飲食優秀賞

・ドラゴンハウス　・アジアの鼓動

フリーマーケット優秀賞

・タイの店

出店広告大賞

・中国留学生同好会　・大場ゼミ

・韓日文化研究会　・茶道部表千家

・よってらっしゃい

音楽イベント優秀賞

・室内楽団カザルス

パフォーマンスイベント優秀賞

・大道芸

文化イベント優秀賞

・中国語劇

イベント広告大賞

・学長杯ディベート大会

・ドイツ語劇グループ

芸術展示優秀賞

・ドイツ旅の絵はがき展

・ヨーロッパの火山風景

教養展示優秀賞

・中国語学科　・ハニ族研究ゼミ

展示広告大賞

・水野ゼミ　・少林寺拳法部

・下田ゼミ

社会貢献優秀賞

・RV-net

社会貢献広告大賞

・骨髄バンク

社会的な取り組み：

ゴミ分別の徹底　屋外のゴミ箱設置数を昨年度の十一ヶ所から三ヶ所へ縮小。また、ゴミ箱を大きくし、分別しやすいものに変更。出店で使われている、発泡スチロール容器は、紙でかるく拭き取ってから捨ててもらうように、来場者に協力を仰いだ。

リサイクルの徹底　膨大な量の半永久的な皿を揃えることが予算的に難しい為、今年度は出店の際に、発泡スチロール容器を使用した。しかし、その発泡スチロール容器は、来場者に汚れをかるく拭き取って捨ててもらい、委員がそれを更にきれいに洗い、リサイクル業者に引き取ってもらうという形を取った。

割り箸の回収　出店の際に大量に発生する割り箸ゴミを回収し、かるく洗浄したものを、製紙会社へ送り、紙へと変えてもらった。

会場整備　車椅子等の通行の邪魔になる排水溝などの溝の補修、体の不自由な方専用の駐車スペースの確保、会場内への車の進入不可の徹底を行った。

リサイクルオブジェの作成　近隣から回収したペットボトルを使用して、「なごみの場所」と名付けた休憩所を作成。また、回収した牛乳パックを粘土に変え、サブオブジェを作成した。そこには、ペットボトルリサイクルの流れを掲示し、リサイクルを呼びかけた。ここで使用したペットボトルは、解体された後、リサイクル業者に引き取ってもらった。

再生紙によるパンフレット作成　麗陵祭パンフレットを古紙一〇〇％の再生紙で作成。

募金活動の実施　気軽にできる社会貢献として、募

金活動を実施。各所に募金箱を設置し呼びかけを行った。また、展示団体による募金活動、また、社会貢献につながる販売活動も認めた。

《麗陵祭を終えて…》

今後の社会の発展の為に

国際経済学部　国際経済学科四年
第三十六回麗陵祭実行委員会委員長　麻生　浩史

まもなく、私達は、二十一世紀社会を迎えます。今私達が生きている二十世紀は、社会全体が急激に発展した時代です。

しかし、急激な発展と共に、私達は、相手（他人）を思いやる気持ちを忘れてきてしまいました。その一例として、現在先進国と呼ばれる国々は、発展と共に世界中の環境を破壊してきました。しかし、近年その危険性に気づき、積極的に環境対策にのりだしました。しかし、先進諸国は、既に大きく発展をしている為、環境対策が今後の経済発展の大きな障害となる可能性は低いですが、世界の大部分を占める発展途上国はどうでしょうか？　経済発展が遅れている分、環境対策に投資するほどの経済力も持っていないでしょう。先進諸国の発展と共に破壊されてきた環境を保護する為に、発展途上国の発展をとめてしまう可能性もあるのです。しかし、これ以上環境破壊をすることは、大変危険なことであり、積極的な環境対策にのりだしたことは、すばらしいことだと思います。ただ、自分達の発展の為に破壊した環境を保護することで他の国々の発展を遅らせてしまうということを、認識してほしいと思います。相手（他人）を思いやる気持ちを持つということは、ある意味で先見性を持つということになります。自分のことだけを考えずに、もっと先を見つめ、後々引き起こされる問題を把握した上で、物事を進めていってほしいと思います。

今後の社会が、更なる発展をとげていくと共に、全人類が、全動植物がすごしやすい世界となっていくに

は、この先見性と、思いやりの気持ちが大変重要になってくるのではないでしょうか。「自分さえ良ければ良い」という考えでは、今後の社会の発展はありえないでしょう。思いやりの気持ちが、社会の発展の全てに影響するわけではありません。しかし、人間として、生活する上で絶対に必要な要素であることに変わりはありません。麗澤大学の麗澤という言葉にも込められている「共生」という要素を大学の講義の中で学べる大学は、なかなかないと思います。「共生」というものを、「思いやりの気持ち」というものを学べる。私は、このことを大変感謝しています。また、次世代を担う若者の主張の場である麗陵祭において、私達は「和　～なごみ～」というテーマのもとに、来場者を含む多くの方々に現代社会の問題点を投げかけました。今回の麗陵祭を通じて地域社会が、二十一世紀社会が思いやりの気持ちにあふれた「なごみの場所」となることを願っています。

麗陵祭に参加して（RV-net）

国際経済学部　国際経済学科四年　滝元　祥子

目覚めた私の目に飛び込んできた景色は、寒さに染まる私の頬よりもほてった色した雄大な山々であった。十一月初旬早朝の日光である。初訪のこの地はその名の如く朝日の光をサンサンと浴びて、氷点下の寒さにも負けず凛とそびえ立つ木々で一杯だった。

今回、青年海外協力隊ＯＢ・ＯＧ講演会、出店、展示と無謀にもトリプルで初参加した麗陵祭。中でも、人生八十年、その半分の四十歳を人生の転機だとして協力隊に応募しパプアニューギニアに派遣された田原彰さん。当時の職場に疑問を持ち、思い切って辞め新しい世界へ飛び出そうとしたホンジュラス派遣の大場康雄さん。自分の協力隊への夢を諦められず、何度も落ちながらも挑戦し続け、見事日本語教師としてシリア派遣の切符を手にした安藤泰子さん。彼らの講演は、普段あまり聞くことのない話だからという以上に、自分らしい生き方・人生への取り組み方の大切さを教え

てくれた。

人間がそれぞれ強い信念を持ち生きる姿は、まさに寒さに負けず立つ日光の木々の姿であると感じた。そしてそれはまさしく今回麗陵祭に関わってきた実行委員の方々の姿であり、RV-netメンバーの姿であったと、今回の旅行の最中考えるのであった。

麗陵祭を終えて（骨髄バンク）

国際経済学部　国際経営学科二年　塩野　啓子

今回の大学祭では「骨髄バンク」と題し、「マモからのメッセージ展」で参加しました。

最近では、かなり耳にするようになった「骨髄バンク」と言う言葉ですが、まだまだ誤解が多かったり、正確な情報が伝わってないような気もします。そこで、今回の麗陵祭をきっかけに少しでも多くの人達に、正確な情報を伝えられればと思ったのが参加をしようと思った理由です。

実際、今回の展示では沢山の方にご来場頂きました。その中で特に嬉しく思ったのは、若い方が「マモからのメッセージ展」をとても興味深く見ていってくれた事です。正直に言うと、最初私は若い人はこういう展示には興味を持たないのでは?と思っていました。だから、今回マモと同世代の若い人が少しでも興味を持ってくれた事がとっても嬉かったのです。それだけで、この展示をしたかいがあります。

もし、今回の事が一人でも多くの人が登録するきっかけになれば良いと思います。

しかし、全国にはまだまだ提供を待っている沢山の患者さんが居ます。その方達に、少しでも希望を持って頂けるようにこれからも活動していきたいと思います。

最後に大切な息子さんの遺品を貸して下さった小野寺さんにお礼を言いたいと思います。ありがとうございました。

麗陵祭を終えて（なんみんを考える会）

外国語学部　英語学科四年　髙橋　綾子

麗陵祭が終わって随分たちますが、あの時の充実感は未だに消えていません。部員全員が「やって良かった」と思える展示でした。今年は例年以上に展示にかける思いは強いものでした。まず、合宿を通して部員同士の交流を深めるとともに、なんみん問題についての意識や関心を高め合いました。そして、今年多くの方が関心を持ったコソボ難民をメインテーマとし、『十分で分かるコソボ紛争』という題の等身大の絵本を作成し、「わかりやすい」となかなか好評でした。また、ビデオを流したり、なんみんに配給される食糧を実際に展示し、日本で捨てられている食糧の量と比較する事によって実感が湧きやすいように工夫しました。展示にあたり私達は、単なる情報提供の場としてではなく、なんみん問題を身近に捉え、日常生活を見直す手助けになりたいと思っていました。展示を見に来て下さった方のアンケートを読み、その思いが多くの方に通じたことを確信しています。なんみん問題は自分とは無関係な事と捉えがちですが、まず関心を持つことが大切です。これからも「なんみんを考える会」では、なんみんについての問題を提起するとともに「私達が今できること」を考え、行動に移していきたいと思います。

中国語劇での三年（中国語劇）

外国語学部　中国語学科四年　白馬　秀孝

〝士別三日、即当刮目相待〟という言葉がある。士は三日会わなければ、その間に大進歩をとげるからよく目をこすってみるのが当然である、という意味の言葉であるが、考えてみると奇妙なもので、あぁ、それだけのことなのかと思ってしまう。

私にとって三年目の麗陵祭が終わった。三年とも中国語劇を通じての参加である。二年目にはその代表を担当し、今年は代表を補佐し支える役目であった。人を支えるということは非常に難しく、私見を述べれば、

傍らにあってそれを支える者というのは絶対的にその人の味方でなければならない。たとえ諫言を述べる時にも、である。しかし私には人を支えきることができず、自分の未熟さがたくさんの人に迷惑をかけ、それでも三年という場所に立っている。

ここに至るまでの道程はいつも間違いと失敗ばかりで、自分を育てた人たちや仲間への感謝を述べる暇もないままに、ただ三年という月日が流れていったように思う。その中で私はいったいどれだけのものを人から得、どれだけの進歩をしたのだろう。

私は昔、〝士〟に憧れていた。それから少しだけ大人になった今、なお私は、〝士〟という言葉の示す場所に憧れている。

ブラインド・ウォーク、車椅子体験から学んだこと（麗陵祭実行委員会本部）

国際経済学部　国際経済学科二年　矢部　弘子

もし、自分の目や足が不自由だったら、そんな気持ちになれたのは、麗陵祭の実行委員になったから。今まで福祉に関する事とほとんど接してこなかった私にとって、今回の経験は、とても大きなものになりました。私の所属していた班では、ブラインドウォークと車椅子移動の体験を実施しました。この二つの体験のうち、私は特にブラインドウォークに興味をひかれました。というのも、新聞で紹介されていた点字案内のミスについての記事を見たからです。このイベント実施にあたり、私は目の不自由な方と直接接することができました。前もってある程度の接し方の勉強はしましたが、実際に会ってから多くのことを学びました。その中でも特に私たちが皆さんに伝えたいことは、自然な気持ちで接してもらいたいということです。確かに、声ではっきりと意志を伝達したり、食事の時などにはどこに何があるかの説明をしたりする必要はあります。しかし、体の一部が不自由な方に対してでも、健常者とほとんど変わりなく接することができる、それが真のマナーであり、思いやりであるのではないかと思うからです。

総務局局長をして学んだ事

（麗陵祭実行委員会総務局局長）

国際経済学部　国際経営学科四年　丹治　清明

私は今年、麗陵祭実行委員会の総務局局長としてやってきました。そこで様々なことを学び、経験し、たくさんの友人を作る事が出来ました。一つだけはっきり言えることは、この総務局局長をやったことによって、私は大きく成長することが出来たという事です。今まで私は何事にも引っ込み思案で、悲観的なものの考え方をしていましたが、もうそうではありません。何事にもプラス思考になり、どんなことにも冷静に対処していくことが出来るようになったと思います。また、何事をするにしてもそこには、誰かが裏で努力をしているという事がわかりました。総務局は麗陵祭の裏方の仕事をしています。しかし、今年一年活動し、私達よりもさらに裏方としての仕事をしてくれている人達もいるということがわかりました。私はこれからそういう裏方として働いてくれている人達のことを大切にしていきたいと思います。そして、何事にも言えることですが、麗陵祭などの大きなものを成功させる為には、一人の力では、何もする事が出来ないという事です。みんなそれぞれ自分の立場、役割を考え、それぞれが努力する事によって大きな成功が生まれると思います。「みんなは一人の為に、一人はみんなの為に」このことを麗陵祭の活動を通じて学びました。これから私も、この言葉をモットーに麗陵祭実行委員として学んだ事を生かし、頑張っていきたいと思います。

『日暮硯』を出展して

国際経済学部　丸山ゼミ

一、『日暮硯』とは

江戸中期、信州松代真田藩の家老恩田木工が、窮乏に陥っていた藩の財政の改革を行いました。それは時代をこえて通用する誠実・信頼・思いやりを重んじて成功させた物語です。

二、なぜ『日暮硯』を勉強したのか

『日暮硯』は、日本的経営の代表的古典であるといわれているにも関わらず、今の若者にはあまり知られていません。また、若者だけでなく、現在の企業では、経費削減やリストラなどが騒がれていますが、それは、恐怖しか与えません。

『日暮硯』の舞台である真田藩は、財政難に陥っていました。財政再建が求められる、その状況は、まさに現代と同じです。そこで恩田木工の建て直しに学んで見ることの意義は大きいと思うのです。

どのように決意し、どのように計画し、そして藩全体にどんなやり方で協力の輪を広げていったのか。

私達は、今日のような時代だからこそ、恩田木工の業績が大切だと考え、彼を研究し、その背景を調べ、麗陵祭に出展することにしました。

三、『日暮硯』の概要

「恩田木工が行政改革の責任者となる」ところでは、長老達をおさえて若くして再建の責任者になります。そこで上席の人々から〈一切木工に従う〉という念書

をとりつけます。そして、自分も不行き届きのあった時は何時でも責を負うという念書を差し出します。

次に、「親戚や家族の心を一つにします。」そのために、家族親戚一同に、そして家来にも、縁をきることを宣言します。いぶかる家族達に〈質素節約の辛さ〉を言い、〈家族が破ったら、直ちにそれが木工への不信感になり、ひいては財政再建の失敗につながる〉ことを言います。家族や家来たちは〈決してそのようなことはいたしません。ご一緒に努力いたします。〉と誓います。

これで家がまとまりました。つぎは、家臣や農民や商人に向かっての施策に進みます。

家臣たちには「給料全額支給、代わりに忠実な職務遂行」を言います。

農民に対しては「未納分の年貢を棒引き」「前納者には出し損」とし、年貢の取り立てに足軽たちは派遣しないで、村の自主的努力にまかせます。さらに悪い役人について殿に直訴状を出すよう言います。その直訴で名指しを受けた家臣には罰を与えるのでなく、殿から〈木工を手伝え〉と言ってもらいます。こうしてすべての人を藩の再建へ向けて結びつけて大きな力にしていきます。

また、子供たちの教育に力を注ぎます。「文武と信心の奨励」です。

次第に領内には勤勉、誠実な気風がみなぎり、とうとう財政再建は成就しました。その後、わずか四十六歳で恩田木工は世を去りますが、今でも松代では〈恩田先生〉と呼ばれています。

四、展示までの歩み、そして展示を終わって

私達丸山ゼミは、二年前の「咸臨丸」の発表に続き、ゼミで学んだ「日暮硯」発表をすることにしました。

そこで、主人公である恩田木工を研究する恩田木工班と、木工の活動の舞台となった背景を調べる松代班とに分かれて調査を進めました。ゼミで話し合い、松代に取材旅行をし、長野にある先生の山の家で合宿をし、みんなの心もどんどんと一つになり、麗陵祭を迎えることが出来ました。二百人ほどの人が見に来てく

ださいました。

今、展示を終えて、改めて振り返った時、人心を掌握するリーダーシップは時代は変わっても同じであることと、良い経営者であるためには、何より人間をよく知らねばならぬ、ということを強く感じています。

次に掲げるのは、ご来室いただきノートに感想を書いて下さった百人近い方々の感想の一部です。

・毎年、研究を続けて本にまとめるとよいと思う
・殿様の仮装をした人が説明してくれたが面白かった
・観光ガイドがわかりやすく松代へ行きたくなった
・現代経営において「日暮硯」は経営の源ということで、その在り方を考えさせられた。恩田木工は今の日本に必要な人物である。

丸山ゼミ（平成十一年度）　丸山康則

四年生　大髙麻弥子、勝又健太、加藤公美、髙木健
　　遠山善彦、根本浩司、萩野陽子、長谷康代
　　古川志保、保坂希世子、稲田由理香

三年生　大﨑優子、尾形夏鈴、篠田幸子、鈴木亮司
　　武田桂、中村明博、福原篤生、前田雄史
　　前田幸大、矢野恵、山口夕佳里、山本眞己

大学院　伊藤宏起

参考文献

大石慎三郎『虚言申すまじく候』筑摩書房　一九八三
笠谷和比古『日暮硯』（新訂）岩波文庫　岩波書店
　一九九六
　同　『日暮硯』と改革の時代―恩田木工にみる名臣の条件　ＰＨＰ新書　ＰＨＰ研究所
　一九九九
川村真二　『真田藩を再建した誠心の指導者』
　ＰＨＰ文庫　ＰＨＰ研究所　一九九七
堤　清二　『現代語で読む日暮硯』三笠書房　一九八八
竜門冬二　『成功する人心掌握術―自己改革の最高名著「日暮硯」』三笠書房　一九九六
奈良本辰也『日暮硯紀行』信濃毎日新聞社　一九九一
藤田公道　『日暮硯　リーダーの心構え―信州松代藩の財政改革に学ぶ』山下出版　一九九六

編集後記

本誌第六号は、「留学を考える」と題して、日頃学生の留学問題に深く関わって世話してこられた教員のうち、今回は本年新設された国際交流センター長の三潴正道先生をはじめとして、一部の先生に執筆いただきました。次回には今回もれた先生にも執筆いただいて、留学問題をさらに深く検討し国際交流の実をあげていただきたいと思います。

さて、水野は本誌発刊以来、第一号から今回の第六号までの編集責任を果たしてきました。今回でその責任を逃れることになりました。その間、本誌が少しずつ教職員および学生諸君に関心を持たれ始めたことを有難く感謝しています。今後は新委員長のもとに一層の充実と飛躍を期待したいと思います。

麗澤教育の理念というものは、すでに出来上がった内容を実践すれば済むというのではなくて、その時代を担う教職員と学生が一体となって、探求し模索するものと理解し、そう位置づけてきました。さらに麗澤教育は学習と生活を統合的に把握するものであり、従って学習課題と生活課題を全体的な視野に取り込む姿勢で理解してきました。本学の理念の一つである「知徳一体」の教育理想は、そうした全人的基盤に立ってはじめて実践可能なものと思います。さらにこの理念を生きたものにするには、知そのものの組み替えと徳の再解釈が必要だと考えます。

今後一層の知と徳の大胆な解釈と統合の試みを諸先生や学生諸君に期待したいと思います。

（水野治太郎）

「麗澤教育編集委員会」（平成十一年度）

委員長　水野治太郎（外国語学部）
委員　鈴木康之（外国語学部）　松田　徹（外国語学部）
〃　土屋武夫（国際経済学部）　竹内啓二（国際経済学部）

編集　『麗澤教育』第六号　編集委員会
発行　麗澤大学
〒二七七－八六八六
千葉県柏市光ケ丘二ノ一ノ一
電話　〇四七一－七三－三〇三〇
印刷所　昌美印刷株式会社
東京都足立区綾瀬二ノ二六ノ七
電話　〇三－三六九〇－三一九六
二〇〇〇年四月一日　発行